

琵琶湖博物館 フィールドレポーター

掲 示 板

2015 年度第1号 通巻第 79 号 2015 年7月 18 日



ごあいさつ

今年度のフィールドレポーター主担当者となりました、大塚泰介です。はしかけ主担当者も兼任しております。

はしかけ登録時アンケートでフィールドレポーター登録の意向も問うという、前主担当者の巧妙な策略(笑)により、ここしばらく漸減してきた登録者数は一気に回復して過去最高レベルとなり、あと少しで 200 人というところまで来ました。

私は、フィールドレポーターの調査の魅力は、大勢の協力者の耳目を得て、一人ではとてもできないような大調査ができること、これに尽きると考えています。その協力者の規模が過去最多レベル、しかも新戦力の多くがこれまで「はしかけ」活動を行ってきた、只ならぬ人たちです。つまり、今こそ、フィールドレポーターでこれまで以上に魅力的な調査を行うチャンスなのです。

フィールドレポーターが行いうる大規模調査にはもちろん、一定の制約もあります。多くの人の関心を惹くテーマでなければ、多くの登録者の参加は望めません。また、調査が極端に難しいもの、参加できる人が限られるものは避けるべきでしょう(私はそれで、ハッタミズ調査をフィールドレポーターに振るのをあきらめた)。しかし、こうした制約を超えて良いテーマ、良い方法を提起できれば、あとは調査票のつくり方次第で、必ずやすごいデータを集めることができます。

この勢いに乗じて、何か面白い調査をしてやろうと考えたあなた！ぜひともフィールドレポータースタッフにご参加いただき、調査の提起をしてください。具体的な調査方法や調査票の作り方、そしてデータ分析の手法については、フィールドレポータースタッフと博物館学芸員と一緒に考えてくれます。

なお、フィールドレポータースタッフの定例会は、毎週第一、第三土曜日の 13 時 30 分から、琵琶湖博物館交流室で開催されています。具体的な調査のプランがなくても、ご関心があれば一度覗いてみて下さい。

もくじ

	表 題	著 者	頁	
1.	ごあいさつ	学芸員 大塚泰介	1	
2	ああ草津川 天井川よ	草津市 久保和友	3	
3	アオダイショウの子ども	栗東市 高瀬喜久雄	4	
4	ゴーヤの日除けと、昔の学習の再確認	彦根市 加固啓英	5	
5	高度の熟練技にインテリジェンスロボを		6	
6	川魚の遡上を助けるラダーを		6	
7	ユッケ、レバ刺しの復権		6	
8	超高級・高価嗜好品の地場産業化		7	
9	見過ごされている無限のエネルギー源		7	
10	何でだろう		8	
11	でっかい話		8	
12	高度の熟練技にインテリジェンスロボットを		9	
13	曾根沼緑地公園を他府県に誇れる自然観察地に		9	
14	リモコンヘリとホバークラフトの活用		10	
15	フィールドレポーター出張交流会に行ってきました		学芸員 大塚泰介	11
16	フィールドレポーター出張交流会報告		里山の会 吉井隆	11
17	フィールドレポーター出張交流会報告		FR/里山の会 松里香織	12
18	フィールドレポーター交流会に参加して	うおの会 手良村知央	13	
19	長浜市西浅井町菅浦「つづらお」に一泊	草津市 椋島昭紘	14	
20	菅 浦 に て	FRS 草津 家猫	15	
21	つづらお荘、食堂の望遠鏡		16	
22	みんな裸足で参拝	FRS 津田 國史	17	
23	ホテルの舞に魅せられる		18	
24	話の肴に、酒がほどよくて		19	
25	傘の下から覗く田んぼ		20	
26	滋賀一番のシイの巨木		21	
27	また行きたい出張交流会	FRS 前田雅子	22	
28	菅浦交流会の写真	FRS 交流会参加者	23	
29	フィールドレポーター7月～9月予定	FRS	24	
30	編集後記	FRS	24	

旧草津川の国道1号線トンネル上の堤防を琵琶湖河口まで片道6キロを歩いた。クルマも通る歩道の舗装路を歩いた。タンポポの花を探したが、まだ咲いていない。去年は雑草のなかに四葉のクローバも見つけたが、今年は比良連峰は真っ白だった。

歩いていたら、草津市の腕章を付けた人がアンケートの紙をくばっていた。

皆様のご意見をお聞かせください。

- 問①** 全長7.0km（琵琶湖～JR東海道新幹線）の草津川跡地は、区間①から⑥の整備計画を策定し、優先整備区間である区間②（メロン街道～浜街道）と区間⑤（JR琵琶湖線～草津川橋）に着手し、整備を進めていることを御存知ですか。*位置図参照
- A. 良く知っている B. 多少は知っている
C. 名前を聞いたことはある D. 知らない
- 問②** 優先整備の草津川跡地「区間②」と「区間⑤」の付近を通ることがありますか。
- A. よく通る B. ときどき通る C. 全く通らない
- 問③** 「区間②」と「区間⑤」については、「にぎわいの場となる広場」として平成28年度末の供用開始が予定されていますが、利用してみたいですか。
- A. 是非行ってみたい B. 一度は行ってみたい
C. あまり興味はない

※答えは下記の回答用紙にお書きください。
※ご記入いただきました情報は、アンケート以外の目的では使用いたしません。

お手数ですがご記入の上、のり付けしポストに投函してください。
FAXで回答される方は、議会事務局☎077-561-2485へお送りください。

草津川跡地整備事業について

まちよりも高い位置を流れる「天井川」として全国的に有名であった草津川は、川としての役割を終えた今、草津川跡地の全域を「緑がつながる広場」としてとらえ、人と人をつなぐ、草津市ならではの魅力ある空間づくりのため、草津川跡地整備を進めています。長い年月にわたり利用されるにぎわい空間として都市価値の向上につなげていきます。

草津川跡地全体位置図



(注) 跡地のより詳しい位置図が「掲示板」前号(通巻第78号)に載っています。ご参考に。

フィールドレポーターの皆様、こんにちは。

私は十数年前にフィールドレポーターをしていた者です。

栗東市に在住していますが、3年前に少し不思議な写真を撮りました。

ある夏の日、私の家のすぐ横に立っている古い柿の木に、おかしな蛇が張り付いているのに気が付きました。ここに住んで17年目のことで、初めて見るものでした。その時点でデジカメを持っていなかった私は急いで量販店に走り説明書も読まずにカメラを向けました。そして初めて撮ったデジカメ写真を送ります。不慣れだったのでピンボケですがご容赦ください。その後、ネットで「あの蛇は何だろう」と調べたら件名の通りアオダイショウの子どもだと分かりました。

4日間、枝と言うより幹に張り付いていましたが、5日目に姿を消しました。写真にはセミが重なって写っていますが、特に意味はありません。

この木は3軒の民家に囲まれていて、竹やぶや小川もすぐそばにあります。

以前にはこの近くで赤い色に、横に線が入った蛇も見えています。50cmほどで、これも調べたらシマヘビの子どもだと分かりました。

秋の終り頃にはうちの母屋から納屋に通じるコンクリートの土間を縦にラインの入ったシマヘビをうんと小さくした10cmほどの蛇が懸命に横切っていくのも見えています。

私は蛇が特別好きで研究しているわけではありませんが、慣れるとかわいいものです。

暑い夏の午後に柿の木の枝で休んでいるアオダイショウや気の荒いシマヘビなど田園地帯で普通に見られる5種類の蛇を全て確認しています。

なお、集落のはずれの少し大きい川の土手で、在来種のカンサイタンポポの小群落を去年初めて確認しました。私の家の敷地内にもカンサイタンポポが生えています。



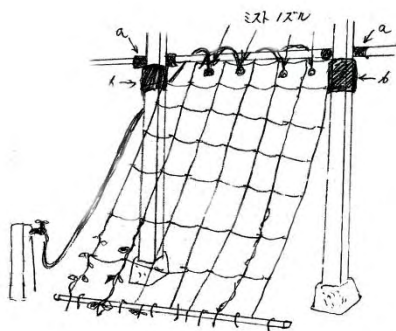
*アオダイショウは幼蛇のうちにはマムシに擬態しており、模様がマムシそっくりです。また、首の根元を平べったくして鎌首をもたげ、マムシの真似をして威嚇してくることがあります。（FR担当 大塚泰介）

標 題 【ゴーヤの日除けと、昔の学習の再確認】

投稿日 【20150527】

彦根市 加国啓英

私の手元に昨年横浜の種苗会社から取り寄せて増やした多量の白い果実のゴーヤの趣旨がありますので、皆様のお宅で日差しのきつい側の網戸の外等に斜めに網を張り、ゴーヤを這わせて日陰を作り、DIY店1500円程のミストノズルの付いたホースから微粒の霧を掛けて室温を下げませんか。



a: 自転車のタイヤチューブ b: 自転車のタイヤ

材料は自転車修理店の産廃物。無料で頂けます。これで縛り付けが容易です。

和名:ゴーヤ、苦瓜、蔓荔枝 ; 英名: Balsam parer

学名: *Momodica charantia*

!!!ゴーヤは苦すぎます。美味しく食べる調理方法をご存知の方が居られましたら御教えてください。

※ 小学高学年か中学で学んだことではありますが、内水や如雨露での散水と霧状にして即気化させる液体から気体の状態の変化では熱の収支が大きく異なることを思い出してください。一気圧下で氷は0℃、液体窒素は-196℃、液体酸素は-196℃と良く言われますが、これは氷が水と、液体地磯や、液体酸素はそのガスと共存した時にのみその温度で、正しくは-196℃以下、-183℃以下というべきです。

又、静かに温度を変化させれば過冷却状態、過熱状態となり、アナと雪の女王の(?多分)女王が過冷却状態の水にトンと足踏みをする途端に一面が結晶化した時、大きな温度変化があった筈です。

冷蔵庫の製氷皿の氷をつまんだ時、指先に凍り付いてくるヤバイ感じのするのは0℃以下の氷で指先の水分が凍ったのです。

過熱した水を揺らすと突発するのもアナ雪現象と同じです。一気圧下で水をどこまで冷やしても氷(個体)で有り続ける事はアルミニウムが660. 2℃以下では常に個体の金属であると同様に全く不思議ではないのです。窒素や酸素の液体状態も同様です。

あまり多量に身近に有る為気にも留めない物質・物体ですが水と言う奴は変わり物(?者)に思えるのです。

自由に運動し接近していた水分子が結晶構造作する事で排斥されて比重が小さくなり水面上に冰山の一角的に「浮上」します。

個体が液体よりも軽い物質はビスマスしか思い付きません。この反対なのがメタンハイドレートでは無いでしょうか。

昔の牛乳のテトラパック形の中心に炭素、四つの角に水素の空気よりも軽い気体が常態のメタンを極性の有る水分子がバインダー役をして固体として水よりも重くしているのでは無いでしょうか。

浮上するメタンガスだけを牡蠣の養殖筏と防水筏の組み合わせで上方置換水上捕集は出来ないでしょうか。メタンガスは空中に拡散すれば強力な地球温暖化ガスとして働く筈です。

標 題【高度の熟練技にインテリジェンスロボを】

投稿日【20150529】

彦根市 加固啓英

宇宙ロボットやそのブースター、新幹線の先頭車両等に熟練者の高度技術と体力負担の大きなヘラ絞り作業が必要と聞きます。

又、近年は他の産業分野でも注目されている和紙も同様であり、製品のサイズも二人で操作できる簾の枠が最大限で、コウゾ、ミツマタ、ガンピ等の原料やトロロアオイ等増粘剤も栽培の面積や人手を要します。

<改善案>

ヘラ絞りのノウハウを自動車産業の溶着ロボットサイズのインテリジェンスロボに装？をインプットし、おおかたの大方の形状までオロットに負かせ、寸法精度のチェックや精密な修正のみを熟練担当者が行う。

これにより高速車輛、リニアモーター車輛の量産、納期短縮と価格低減が計れれば国際競争力アップにも繋がる筈です。

和紙の製紙用水槽を復水にしてベルトコンベア式のPPのネットで連続上げ下げし、自動乾燥、巻取りが出来ると思います。

道路にはみ出し、線路堤や河川堤にはびこるクズの蔓は良質の繊維植物であり、刈り取られて焼却、二酸化炭素となっている筈です。

これらを和紙の原料に充当すればコウゾ、ミツマタ、ガンピ等の栽培面積も、マンパワーも低減できる筈です。

標 題【川魚の遡上を助けるラダーを】

投稿日【20150610】

彦根市 加固啓英

人の都合で開閉する水門や堰板で流れたり干上がったたりする水路、特に線路堤の下などに多い水路の途中の垂直の壁、水田から排水路への間の段差。

これらが本能に従って水流が有れば遡上し、水が干上がれば全てが繁殖水域に行き付けずに死に絶えます。

琵琶湖博物館の発案・指導で水路の段差に掛ける「遡上ラダー」と云ったプラスチックの組立て樋を製品化・商品化できないでしょうか。

標 題【ユッケ、レバー刺しの復権】

投稿日【20150425】

彦根市 加固啓英

地場産業にレバー刺し用生レバーやユッケ用生肉を。

馬刺しが安全で、生レバー・生肉が危険だとは、どうしても解せない。

生レバー・生肉を市販の飲食物や調味料・香辛料で前処理することで、公的衛生機関で食の安全の保障の得られる 75%程の自信があります。

レバー刺し、ユッケを取り扱われた方のお話を伺い、琵琶湖博物館の実験台の片隅とガラス器具をお借りしてトライ出来ないでしょうか。

知的所有権は琵琶湖博物館の関係者に申請して頂き、滋賀県をレバー刺し、ユッケ特区にするのです。

以上、御検討、御助力を御願い致します。

標 題 【超高級・高価嗜好品の地場産業化】

投稿日 【20150425】

彦根市 加固啓英

弥次馬スピリットに富む養豚業者さんで利益が上れば税収が県に入るとのお話がしたく、御連絡が頂きたいです。

知的所有権のからみもあり、出来れば琵琶湖博物館を御説明、打合せの場として使わせて頂きたいです。

目的は、富豪や成金が競って買い求める超高価嗜好品の商品化です。

標 題 【見過ごされている無限のエネルギー源】

投稿日 【20150425】

彦根市 加固啓英

天体の運行が停止しない限り続く、巨大エネルギー源が見過ごされております。これを発電に当てれば即卒原発、脱原発が可能です。

日本の全周を取り巻く、かなりの部分はコンクリート護岸と波消しブロックで被われておりますが、この全てが荒ぶる？潮の干満や波浪エネルギーの支配下にあります。

私案 1. 海岸線に手を加え、満潮時や大浪の時には海水の流入する人口のタイドプールを棚高段々畑の様に何段かにして建設します。そのオーバーフローパイプに水流で回転する発電機を設けます。この人工のタイドローブは活魚の生簀にも稚魚の養殖池にも活用出来ます。

私案 2. コイル入りパイプと磁石入りフロートでの発電

私は前世紀末の定年退職までの約 30 年間は外資系のコンピュータ、メーカーで応用化学を生業として来ましたが、どうも電気という輩の気心が知れないのです。

借金を背負った電子が西に向かってトンズラする事がなぜ電流が東に流れたことになるのか？

アノード・カソードの和訳が時には陽極・陰極、又、時には陰極。

「ややこしやー。ややこしやー(狂言調で)」

次に示す図の装置で電力エネルギーが有効に得られるのかを電気に詳しい方の検討を御願します。



(絶縁オイル封入コイル)

電力が得られた場合は、「恫唱！眩価方式！」の既存の電力会社には売電せず、鉄塔送電線で最寄りの電鉄会社へ売電。

電鉄会社の広域の路線沿線からの地下配線で電力需要者に送電します。

明治初期のガス灯がようよう白熱電球の街灯に換わろうとする、路上には牛・馬車以上に大きな物が無かった時代の木材をコンクリートに変えただけの電柱は自動車が触れただけで手術中の病院も停電し、踏切も、交通信号も機能しなくなり、街中が貧困国並のクモの巣状の配電線網。

世界遺産の富士山を撮影すれば雲・霞の配電線の非文化遺産として世界中に知れ渡る。

この恥を何時まで続けますか。

標 題 【何でだろう】

投稿日 【20150425】

彦根市 加固啓英

BBC-TV、KBS-TV のeボタンでの環境放射線情報に原発銀座から関ヶ原～名神自動車道路に吹き抜けて混乱をもたらす風のラインに観測データが無いのは何故だろう。

事故を起こした原発の周辺の海中のコンブ、ワカメ、ヒジキ等の褐藻類のヨウ素の分析データが測定されない or 報告されないのは何でだろう。

標 題 【でっかい話】

投稿日 【20150517】

彦根市 加固啓英

生物について語る時、先ず出て来るのが「和名」又は「標準和名」。

だがそれらが飛んでもないソバツタ物。

そこで琵琶湖博物館が発案者となって、科学的分野ではそれらに置き替り、それらを払拭する「系統和名」を提唱、創造に着手しませんか。

<現状>

これらを規定するルールが一切無い。岩波の生物学辞典(3版)にも坊主に寝言。タイプサンプルの保管も、もの種を規定する文書も、登録先も、登録者名も不明のままに使用されている。

道の前方を横切った動物にも命名でき、ヌートリアがカワウソ、河童にも成りかねない。

<個々の事例>

* * ネズミに齧歯目のドブネズミ、クマネズミ、アカネズミ、等と紛らわしい。トガリネズミ、カワネズミ、ジャコウネズミ、ジネズミ等日本に15種程棲息。これらの食虫目を識別出来る方法、* * ネズミA等とする。

* * カラスにハシブトカラス、ハシボソカラス、ミヤマガラス、等誰の目にもカラスと、小型で外見の異なるホシガラスやコクルマガラスは納得がいくが、同科のカササギやオナガやカケスには語尾に「カケス」が付かない。カラス科ではないのに「黒いからカケス」のウミガラス、カワガラス、も何とかしたい。

門を異にする同じ和名の種が7つ程有ったと思います。

ヤマトシジミ； 昆虫の鱗翅類と軟体動物斧足類の二枚貝です。

※ 他にも5~6種有った筈ですが現在は失念、思い出せません。

<解決私案>

科名毎にアルファベット、大文字2文字で科を(26² = 676 分類可)、属を同小文字で2字を、紛らわしい場合に頭の書き出しをします。

例; ACdaヤマトシジミとDKabヤマトシジミで昆虫と斧足類を区別します。

命名、登録方法、登録・記録保管先、タイプサンプル保管場所、種の規定書の規格、それらの確認検証、照合場所、等を県内の自然科学系博物館や高等学校の生物担当の教師を巻き込んで統一文書化します。これは国レベルで成し得ていない事を滋賀県から発信する意味が有るのです。

標 題 【高度の熟練技にインテリジェンスロボットを】

投稿日 【20150517】

彦根市 加固啓英

宇宙ロケットやそのブースター、新幹線の先頭車両等に熟練者の高度技術と体力負担の大きなヘラ絞り作業が必要と聞きます。

又、近年は他の産業分野でも注目されている和紙も同様であり、製品のサイズも二人で操作出来る簾の枠が最大限で、コウゾ、ミツマタ、ガンピ等の原料やトロロアオイ等の増粘剤も栽培の面積や人手を要します。

<改善案>

ヘラ絞りのノウハウを自動車産業の溶着ロボットサイズのインテリジェンスロボットに技術をインプットし、大凡の形状まではロボットに負かせ、寸法精度のチェックや精密な修正のみを熟練担当者が行う。これにより高速車輛、リニアモーター車輛の量産、納期短縮と価格低減が計れば国際競争力アップにも繋がる筈です。

和紙の製紙用水槽を複水にしてベルトコンベア式のPPのネットで連続上げ下げし、自動乾燥、巻き取りが出来ると思います。道路にはみ出し、線路堤や河川堤にはびこるクズの蔓は良質の繊維植物であり、刈り取られて焼却、二酸化炭素となっている筈です。

これらを和紙の原料に充当すればコウゾ、ミツマタ、ガンピ、等の栽培面積も、マンパワーも低減出来る筈です。

標 題 【曾根沼緑地公園を他府県に誇れる自然観察地に】

投稿日 【20150510】

彦根市 加固啓英

1970年代、私が関東から移住した当時は内湖であり、オニバス等の珍しい植生も多く見られた荒神山と湖岸道路の間の「県立曾根沼緑地公園」は惨憺たる有り様です。

自然に親しむ筈のツリーハウスはコンクリート製鉄梯子付き。

縦割り県政を思い切り反映した色もサイズも高さもバラバラな標示板が視界を遮って所せましと乱立、その何れもがベカラズ大全集。

観鳥小屋は堂々と人にも野鳥にも、その威容を示し、南に面した窓からは終日逆光の水鳥のシル

エットが観察出来、泊まり込んだホームレスの炊火か、内部は焼け焦げ跡の火事寸前。

公園内での自殺者も数人出たとも聞きます。

管理者、管理室が無く犯罪の多い筈のトイレには目が届かず、公園の屋外の水栓は全て打ち壊されており、時々バイクの暴走族が入り込み、暴れ回る。「ゴルフ練習禁止」の標示板は全て抜き取られ、持ち去られ、芝生はジャリッ禿げ状態で子供達の顔をゴルフボールが掠め飛び、今では家族連れの姿も見掛けられない。

荒神山からの冷たい湧水も水？のU字溝での廃水、排水扱い。

危険で使用禁止の遊具群。

フロリダ等の湿地・沼地の樹木のヌマスギ(別名:ラクウショウ、落羽松)が植栽され、やたらに空気根を生やしながらい池の水域に進出しつつあります。

ここは整備すれば超一級の水鳥の観察地・親自然公園として県内外からの集客、経済効果にも繋がると思います。

琵琶湖博物館の指導の下にボランティアのマンパワーで全国に誇れるミニ自然観察公園にリフォーム、リニューアルしませんか。

近日中にリフォームの私案を示させていただきます。

標 題 【リモコンヘリとホバークラフトの活用】

投稿日 【20150529】

彦根市 加固啓英

山や湖沼での行方不明者の捜索に実物のヘリコプターが使用され、土砂崩れや地震での孤立集落の救助や支援に自動車を使用されるが、気流の乱れ易い山間部等ではヘリコプターの弱点のLTE (*loss of Tail-rotor effect* ; テールローターの吹き出す風が風上に回り込んで、その働きを無効にし、メインローターの反作用で機体が回転しだして墜落に至る) が起き易いが、これを支援車が乗り入れられる範囲まで近寄り、農業用の大型リモコンヘリコプターのカメラで支援車内の複数の人の目で、機体及びズームやGPSでの位置を特定すれば効率も良く、防寒シート、水、食料程度は投下でき、墜落した場合でも人命は失われず、損失金額も軽微な筈です。

ホバークラフトに代表されるエアクッションカーを車輛に換えて使用すれば海・湖沼・河川・河床の最上流までが専用道路となり、崩壊した道路・山砂・瓦礫も難なく乗り越えられ、多数・多量の人員・物資の輸送・揚陸もスムーズに行えると思います。

異常繁殖したカワウや街路樹を塹(とや)とするムクドリの大群を駆逐するために鳥獣逐除に猟友会員を招集して銃を持ち出さなくともホビー用のエンジン付きリモコンヘリコプターで十分の筈です。

鳥獣逐除の期間は犬の散歩も儘ならないのです。

フィールドレポーター出張交流会に行ってきました

FR担当学芸員 大塚泰介

フィールドレポーター出張交流会を、琵琶湖の北、高島市西浅井町菅浦を中心に、6月20日、21日の2日間、1泊2日で開催しました。部分参加も含め、計16人が参加しました。旅程は概ね以下のとおりでした

20日15時～菅浦散策／18時半～夕食会／20時～ホテル観察／22時～夜の宴会／21日8時～朝食／9時半～前日のホテル観察の地の検分／10時半～湖北の巨木めぐり(12時～昼食)／14時解散

以下、参加者の皆様の報告です。

琵琶湖博物館 フィールドレポーター交流会 with はしかけ

はしかけ里山の会 吉井 隆

集合場所は国の重要文化的景観に選定された琵琶湖最北端の菅浦にある旧国民宿舎つづらお駐車場、少し早く着いたので集落内を散策しながら「かくれ里」の雰囲気を感じ、文化的景観選定にされた理由を納得しました。学芸員3名とフィールドレポーター・はしかけ合せて16名の参加者、顔馴染みのある方々が多く和やか。顔合わせのあと、須賀神社、集落散策で交流会がスタート、境内では、タマムシ発見、巨木観察、素足での参拝など初めての体験、二時間たらずの散策で参加者の会話が弾みました。竹生島、大浦湾を見おろせる露天湯につかりながらの散策疲れの癒しや食後のトーク時間で、学芸員と参加者がともに深夜遅くまで熱く語る交流合宿になりました。自然観察では、ツバメ、タマムシ、ゲンジホテル・ハイケホテル、親子の鹿、トンビの幼鳥、ナゴヤダルマカエル、シュレーゲルアオカエル幼生、脱皮直後のアキアカネなど、ふだん目にする機会が少ない昆虫、動物観察を満喫。さらに、イチョウやスダジイ(シイの一種)の巨木観察、幹周り計測で巨木の生命力に感動しました。今回は、一回目の交流合宿にも関わらず忌憚のない意見が飛び交い、琵琶博に対する参加者の思いの強さを再認識する場になりました。このような思いのある人たちがたくさんいることが創立20周年を迎える琵琶博を支えていることを感じました。



フィールドレポーター出張交流会報告（菅浦 2015. 6. 20～21）

フィールドレポーター・里山の会：松里香織

（家族参加：松里隆平・フィールドレポーター・里山の会：松里凜）

永原まで電車からだんだん山深くなっていく風景を琵琶湖と共に感じる事ができ、観察に行くことより、こども(凜)はどこか遠い所に泊まりに行くことにわくわくしていました。

集合場所の駐車場・修復中の四足門(西)・須賀神社・菅浦の道々で、毛虫がいっぱいて、宿の人が「春は海津大崎の桜と一緒に訪れる人が多い。」と言っていたことを思い出しました。こどもは、毛虫を発見しながら、踏まないように歩きながら遊んでいました。

須賀神社の参道では、参加者の方々と松の木やゴミ虫などを見つけながらお参りをし、帰りに参道の入り口近くにあるムクロジの木の実をこどもと探して拾いました。

菅浦の港では、洗濯にも使う棧橋に上ったり、アキアカネの抜け殻を見つけながら、四足門(東)淳仁天皇菩提寺後碑、ヤンマー工場、民家などを見学しながら、村を一周しました。葦より港のコンクリートにトンボの抜け殻が多いのに驚きました。俵草という俵のような実をつける植物もありました。琵琶湖から山が近い風景と竹生島が見えるのが印象的でした。



夕食後ホタル観賞に行き、パワーっと光るホタルの柔らかい光に「夢(の世界)みたい」とこどもと言いました。ゲンジボタルだけでなくヘイケボタルも教えてもらい見る事ができました。こどもも私(幼い頃行ったらいいのですが、記憶にないので)も、初めてのほたる観賞でした。



翌日、朝食の場所から鳶のひなを望遠鏡で見た後、雨の中、昨日のホタル観賞の場所でカエルになりそうな半オタマジャクシや、シュレーゲルアオガエル、カワニナ、タニシなどを観察しました。

そして、時々雨のところ、巨木めぐりで阿志都彌神社・行過天満宮、樹下神社の順に行き、入り口の巨木の直径を測り、神社の植物観察をして、巨木のある神社の木々の癒しのパワーを感じました。

出張交流会を通して虫や自然と触れ合うことができ、家族で楽しめました。ありがとうございました。

フィールドレポーター交流会に参加して

うおの会 手良村 知央



初めて参加させていただきました。
何年かはしかけ活動に参加させていただいておりますが、普段は夜空と水の中しか見ておりませんでしたので、そろそろ陸の上にも目を向けられるようにとの気持ちをもって軽い気持ちで参加しました。

交流会ということでしたが、菅浦神社までの道すがらに飛び交う情報から皆様の知見の広さと活動歴に驚愕することとなりました。定年後からが活動期との諸先輩方の姿勢や、まだまだ学ぶこと・考えるべきことの多いことを痛感しながらも菅浦散策が終わるころには私の頭は飽和してしまいました。

私は一日だけの参加でしたが、たいへん内容の濃い勉強会であったようにおもいます。いろいろとご指導いただいた皆様、どうもありがとうございました。さらには綿密な下調べまでしていただいていたとのこと、この場をお借りして感謝の意を表すとともに、気軽に参加した自分を反省しつつ、次回から参加させていただく場合には、データレコーダーなどの装備を固めていきたいと考えております。(笑)

フィールドレポーター宿泊(6月20, 21日)交流会に参加して

長浜市西浅井町菅浦「つづらお」に一泊

草津市 柁島昭紘

奥琵琶湖の雄大な眺め、前方に陰の竹生島を望む湾、ゆったりとした気分させられる。ここ菅浦の宿に一泊して、多彩な事事物物を見、聞きして、宿泊交流会ならではの充実した2日間を過ごすことができました。準備、当日のお世話をして頂き、本当に感謝申し上げます。次に印象に残ったことを時系列的に述べます。

一日目申刻編、西四足門(要害の門)から菅浦の里へ入る、即、須賀神社の参道に入る。学芸員の説明聞きながら植物や昆虫の観察をした。金緑色の「タマムシ」が草の上で出迎えてくれておお喜びした。参拝は神社の断り書き通り素足になって、ヒンヤリ・チクチクとした感触を楽しみながら上り本殿に合掌。参道を下り東四足門まで波除けの石積み土手に沿って港を散策、沖すくい網漁の「ガシャンコ船」を初めて見た。コアユ漁の方法を聞いた。トンボの抜け殻発見、「コオニヤンマ」と教えてもらう。東四足門到着、人家は途絶えた。帰路は浦里に入る、淳仁天皇菩提寺長福寺跡碑、五輪塔を祀っている。その横に二宮金次郎像を見つけ懐かしく眺めた。湖岸に寄り添う里の佇まいです。

一日目戌刻編、夕食後宿のバスで西浅井町八田部の八田部川に出かけてホタルの観察です。西の空には、月齢4の細い月を金星と木星がはさみうちするというおもしろい光景が見られる日で、雲に一部見え隠れしましたが観察できた。ホタルの観察には絶好の闇、川の上に乱舞する幻想的な光、飛んできたホタルをそっと捉えて観察、学芸員にホタルの発光のことや、みと♀、ゲンジボタルとヘイケボタルなど説明して貰いながらのんびりと楽しみました。

一日目亥刻編、入浴後、参加した皆さんと飲み物とお菓子を食しながら歓談会です。アルコール類の潤滑油の効果もあって、フィールドレポーター活動の現状や活性化するためのアイデア等自由に意見交換して宿泊交流会でしかできない盛り上りで話がはずみ、二日目丑刻に割り込みました。

二日目卯刻編、近くに落ちたと思われる雷鳴で目が覚めた。朝の露天風呂に入り、雷鳴の余韻が残る中、柴垣越しに雨に煙る奥琵琶湖を眺めながらウトウトしました。

二日目巳刻編、朝食の後宿チェックアウトして、アキアカネの羽化の観察に向った。場所はホタルの観察をした八田部川沿いの田んぼ。そこは里山に囲まれた緑豊かな場所です。降りしきる雨の中心配しましたが、羽化したアキアカネが抜け殻の上に止まっているのを見つけました。1頭見つけると、あちこちから歓声が上がりました。田んぼには他にもカエルやタニシが見つかります。ナゴヤダルマガエル、シュレーゲルアオガエル、マルタニシと学芸員に教えてもらう。この地は夜にはホタルの天国、夜が明けると田んぼは多くの生き物がみられるという豊かな場所でした。

二日目午刻編、シイノキの巨木探訪です。今津町弘川の阿志都弥神社の御神木のシイノキです。注連縄がかけてあり、里の人々に大切にされていることが分かります。幹回りは約7m、樹肌は瘤など凸凹で圧倒的存在感です。樹齢伝承1000年。スタジイと表示ありましたが、落ちていたドングリを見るとツブラジイとスタジイどちらにも取れる大きさでした。この森には他にも幹回りの1m位のシイノキが数本見つけました。

今回の宿泊交流会で見たこと、聞いたこと、体験したことの中で印象に残ったことをだらだらと紹介しました。充実した交流会だったことを少しでも感じてもらえればと思います。

よなか、雨が強くなったのは判っていたが、雷も鳴り出した。その響きは山々にこだまして、ふだん平地で聞く以上に感じられた。

前日、葛籠尾崎にあるたった一つの集落、菅浦に向かって葛籠尾崎のくねった湖岸の道を辿っていて、半島のこんな先に住み着いた最初の人達に思いを巡らせていた。船でしか来られない水際のわずかな土地に住まうには、それなりの訳があったと思う。

参考資料としてもらった、水上勉の近江散歩抄には「戦いに敗れ、湖水を渡って越前に逃れようとして嵐に会い、この入り江に流れ着いた人達も居た」とある。また「この辺へ来ると、人影もまれで、湖北の中の湖北といった感じがする」と記されていて、“湖北の中の湖北”とは、言い得てうまいと感心していた。

夜半に轟くイカズチは、海津大崎の山と、この葛籠尾崎の山とが並んで突き出し、琵琶湖を抱え込むようになっている地形効果だろうか。音が龍の声になって双方の山々にこだまし、鳴り響いているように感じた。

昔から菅浦人達には聞きなれた響きなのかな。私も一晩だけ菅浦人の仲間入りをさせてくれたかと、ねぼけ眼をこすりながら朝を迎えていた。

朝いちばん、竹生島が正面に見える展望風呂に浸かって、贅沢な自分だけの湖北の朝景色を堪能していた。東の湖辺は山の陰で見えない。その代わり真南の竹生島は菅浦の庭先なので、葛籠尾崎の右ついそこに雨に煙って見える。

いまは漁のはざまなのか、その時間でないのか視界のどこにも漁船はない。ほどよい温もりにほだされ、寝不足のまなこに映っていた風景がぼやけ始めて、もうろうとなりだした頭で、景色も温泉も独り占めに出来たこのひと時を、なんとか記憶にとどめておかねばと考えていた。

海津の桜はヨットで訪れたので、次はカヤックかカヌーでゆっくり入り江を巡り、水面からの低い目線で葛籠尾崎・菅浦の桜も面白いかなと思っている。

西四脚門の脇にある須賀神社参道の鳥居。

バス停標識の奥には銅板葺の神社の建物(神輿蔵?)があった



つづらお荘、食堂の望遠鏡

FRS 草津 家猫

朝飯を食べた大広間の隅の窓際に、外に向けてセットされた望遠鏡があった。宿泊客が、竹生島や湖上を眺めるために、自分の望遠鏡を置いていると思っていた。ところが、その望遠鏡を、食事を終わった人たちが、かわるがわる覗いているのが不思議ではあったので、私も食後そこに行った。“トンビの雛がいます”と窓ガラスの貼り紙を見てすべてが判った。つづらお荘のスタッフが、窓から左 100mほどの樹木の葉陰に焦点を合わせた野鳥観察のサービスだった。

2羽のトンビの雛が見えた。手前の一羽が羽ばたいた。トビ色の羽根の色がよく判る。窓から近い電柱に親鳥が巣のほうを見ている。こちらは肉眼でもわかる。雛はもう巣立ちも近いように思った。巣の全体は葉陰になってよく見えないので、他にも兄弟がいるのかどうかは確認できない。望遠鏡は三脚に固定されていて、接眼窓に目を当てるだけで良いように配慮されている。

このつづらお荘の近くでトンビの営巣、産卵を見つけたスタッフが、お客さんへのサービスに始めたのだろう。トンビの巣作りから雛が生まれるまでを、ここのスタッフは温かく見守ってきて、私たちにも丁寧に見せてくれている。

つづらお荘のスタッフの配慮は、昨夜の料理の献立の解説にも表れていた。それぞれの材料に滋賀の産品を重視していること。簡単な説明ではあるが滋賀の食材でもてなそうとの心意気が充分にくみ取れた。

菅浦に泊り、ホテルの乱舞が見られて大満足であったし、予期せぬ巣立ち前のトンビが見られたのだから贅沢は言えないが。今回の交流会で、鯰の産卵が観察できなかったのはちょっと残念。

今度はぜひ、11月からの鴨料理や、かぐや餅も賞味したいと惹かれる菅浦であった。



つづらお荘の部屋から見える竹生島
右は展望風呂の屋根

みんな裸足で参拝（菅浦交流会報告 1/5）

FRS 津田 國史

靴はもちろん靴下も脱いで、素足で石段を踏んでお参りしました。

菅浦での交流会は変化に富んだ楽しみの連続で、まことに面白く充実した2日間でした。

6月20日（土）、琵琶湖の最北端に突き出た、葛籠尾崎の先端に近い菅浦。この「つづらお荘」でフィールドレポーターとしては初めての宿泊交流会でした。



ここからは素足になって石段を上がる

菅浦の探索は西四脚門から。ところがその西門の茅葺屋根に、さらに屋根が被さり修復中。検問は？代って私たちが西四脚門を観察、昔の村への出入りを偲んでいた。

この門の脇にある鳥居をくぐって、山腹に伸びる須賀神社参道の植物や、石灯笼に付いた昆虫などを観察。神社下の手水鉢まで上がると、土足禁止の札があり、ここからは履物は脱ぐことになっている。最近のスリッパが用意されているが、みなさんは使わず、琵琶湖博物館・フィールドレポーター菅浦交流会の参加者は敬虔。自然石で作られた石段の感触を素足で楽しみ拝殿まで。ところが拝殿脇から本殿までは真新しい碎石が敷き詰められ、角のある碎石に体重をかけると、足裏に刺激がありすぎて歩行は自ずと慎重になる。巧まざる演出？と勘繰る。

参拝を済ませてこんどは湖岸沿いの草木、昆虫などを手に取っては学芸員の解説を聞き、己の蘊蓄を披露したりしてのんびり歩く。琵琶湖からの風もほとんどなく、湖は灰色の梅雨空を映して白灰色の水を湛えて静かだ。もっとも若い参加者（小1）が、護岸壁に付いていたヤゴを採集。注意して見ると護岸壁の湖水から同じような高さ、同じような西面に多く付いている。この菅浦でトンボの産卵は湖水際の護岸壁の藻なのだろうか。

東四脚門は集落の東端湖岸に、しっかりと四脚を踏ん張っていた。そして強風にも耐えられるよう、頑強な岩石を前後の脚柱に渡した棧に載せてサポート。集落のもう一方を固めて揺るがない東門を背に、琵琶湖博物館フィールドレポーターは菅浦交流会の記念写真を撮っていた。

家屋を建てる土地だけがやっとならぬと、山と湖水に挟まれた菅浦集落に、いまでも多くの古い文物が残されているのは、近代まで僻地であったが故の余慶なのかな。

ホタルの舞に魅せられる (菅浦交流会報告 2/5)

FRS 津田 國史

どこに案内されるのか予測できなかった。

菅浦「つづらお荘」のバスは、私たち琵琶湖博物館一行以外にも同宿の客で満席。菅浦でホタルを見られるような所は思い当たらないから、大浦の北か、それとも永原の北、山門湿原からの流れのある田園地帯を予想していた。

バスは葛籠尾崎西岸の闇を縫って北上、誰かが“月と明星と木星が西の空に！”と言っている。帰りにはこの辺りで2頭のシカが迎えてくれた。303号の大浦口で、左！との予測は外れ、指示器は右に出て信号待ち。へえ？この先なら塩津だ、えらい遠くまで遠征と驚いていたら、城山トンネルの直前でまた右折。おお！私がかねて探索してみたいと思っていた地区だ。ここは山懐にある集落で、他と隔絶され何かがあるぞと期待していたところではある。ここにホタルが居てくれたかと納得できた。バスは集落の道をゆっくりと進み、右折して停まる。

暗闇に目が慣れるまで戸惑うが、案内を頼りに農道を歩むと、行く手にホタルの光が見えてきた。先導の運転手さんが足元を照らして、“この先は川ですから落ちないように”と注意してくれる。ホタルに気を取られていると大変なことになるぞと気を引締める。

想像した以上の凄い乱舞だ。流域に沿っての見事なホタルの舞は初めて見るものだ。私の集落の源氏ボタルも多かったが、これほどではなかった。頭上に来たのを手にして小学生の彼女の小さな掌に乗せると、ぼうっと指のあいだが明るくなった。運転手さんに言われて気付いたが、今夜は気温もほどよく、風もなく、月も三日月で適度に暗く、ホタル飛翔には最適で、良い時に来たものだと嬉しかった。

向こう岸の集団が点滅を合わせるのも初めて観察できた。点滅の同期を知ってはいたが、実際に眼にするのは初めてだ。ある集団が点滅を同期させる目的はまだはっきり解明されてはいないらしい。しかし関東と関西のホタルとでは同期しないと解説を受ける。

この川筋、八田部川は、八田部の集落の人たちの環境保全によって、いまのホタルの生育に適した環境に戻った。一時はホタルの少ない時もあったとのこと。私の集落の現況を知るだけに、消滅したホタルの復活がどんなに大変かよく解る。このホタルの舞を見せてもら



八田部川(左上から右下)の流れに沿って、山際にホタルが乱舞、カエル・トンボは川畔の田んぼで観察(画像は Google Earth から。白点は筆者)

い、八田部の人たちに、よくぞ保護してくださいました、ご苦労さまです。有難うございますとお礼を言いたい。

飲みながら真面目に仕事の話をする。勤めていた頃を思い出していた。
昨夜はとうとう丑三つ時ちかくなってからの御開となった。

つづらお荘の人に給仕されての宴会は、向き合って正式の宴会。近江の食材がメインで、ビワマスのお造り・小鮎の八朔マリネ・近江牛鍋など、珍味ではないが、普段あまり食べないものばかりだから、私は嬉しく賞味した。



そして交わされる会話も、定例会で耳にする事象とは違った内容のものも多く、酒の肴になるものばかりで、この会に参加したのは正解！と納得していた。

普段の定例会や交流会では、どことなく儀式だったものがあり、良い悪いは別にして公式な会合の姿だと認識している。

20日夜の つづらお荘の夕食・献立と箸袋

ところで、今宵の会は、いうなれば個人の寄合とでも言えるもので、袴から浴衣に変えての飲み会である。

皆さんそれぞれに自分の思いを語り話が弾んだ。

宴会の後、ホテル観賞に出かけて帰り、竹生島に見える展望風呂に浸かった後、こんどは 205 号の学芸員の部屋に集まる。宿の浴衣ありパジャマあり、完全にリラックスした姿の男女 11 名が座卓を囲む。卓上には珍味、つまみ、色とりどりの缶ビール・異国のノンアルコールあり、脇にはまだ箱入りビールやら、袋入の肴が控えていて、205 号室は人とこれらで充満。

話題は生真面目。博物館の交流会、はしかけ・FRの運営論にみなさん、かんかんがくがく。勧められるいろんな酒を飲み比べたり、話に落ちを付ける人があつたりして、とても楽しい飲み会となった。

オフレコだが、出来れば公開しても良いのではと思う生真面目な話が、丁々発止と展開。聞くほうが話の肴にと、酒やつまみに手を伸ばす。食べ比べもまた楽しく、飲まないひとと味覚に挑戦しながら、論戦にも持論を披露する。宴会後の宴会を二次会というが、この二次会は定例会の余禄としても、それを上回る質量の大きく重いものであった。

盛会はつきることなく続けば空が白みだすところだろうが、日付も変わったところで、卓上で交わされたあれこれを反芻しながら、それぞれ自室に戻った。

傘の下から覗く田んぼ (菅浦交流会報告 4/5)

FRS 津田 國史

昨夜の優雅な舞台装置を観に行く。

6月21日(日) 昨夜ホタルの舞を見た川畔の田んぼを観察するのが今日の最初の目的だ。7台の車に分乗して昨夜の八田部川畔に着く。雨装束に身を固めての観察もまた愉快。



明るくなって見た八田部川は、足元から人の背丈ほどの下を、濁り気味に流れていた。意外に川底は深いが水深は20cm位か。明け方の雨で濁りは始めているが、いまの水勢は山に近いところとしてはさほど強くはない。だがホタルの幼生が生息するには限界だろう。

両岸は四角で浅いくぼみのあるコンクリートブロックが張られ、コケが繁茂し、それにところどころ葛が絡んでいる。上手には適当な段差が造られ、川床にブロックの突起があって水勢を弱めている。雑草が大きな繁みを作るほどではないが、川床に淀みと砂礫地を作っているのがホタルの生息に貢献しているのかな。

対岸の樹木は桜だった。その後ろは山の繁みで竹はない。この環境を維持するための作業は、集落の人々の奉仕で保たれていると聞いたが、ホタルのために適当な草木を残す繊細な気遣いがあるとのこと、機器だけでは創れない環境だ。

やっと後ろ足が出たばかりで、まだカエルになりきれないオタマジャクシが多い。オタマジャクシからカエルになる過程は、生涯で最もエネルギーの消費が大きい時期であり、この時点で他に回すゆとりはなく、カエルになるときにオタマジャクシの頭胴の長さより少し縮むと学芸員から説明を受ける。

ヤゴを見つけたひとが居た。それがアカトンボの幼生だと教えられ、去年の秋にこの八田部川 畔の田んぼに飛び交ったアカトンボを描いていた。そんな姿をフィールドレポーターの観察会でまた見たいと思った。

ゲンジボタルもアカトンボも、ナゴヤダルマガエルも生育する八田部川 畔だった。

滋賀一番のシイの巨木 (菅浦交流会報告 5/5)

FRS 津田 國史

巨木と言われてはいるが、二股に分かれて伸びたシイの木にさほど威圧感はない。先ほどの今津のシイは、ご神木として、しめ縄が張られていたので威厳を感じたが、この二股のそれぞれは、普通の木のやや太いものと感じるくらいだ。



←滋賀1番の天満宮

↑滋賀2番の阿志都弥神社

旧161号の脇にあり、しょっちゅうその下を通りながら気付かず、以前、この天満宮の植生を観察に来たのに、記憶にないのは、やはり二股樹形にあるのかも。何やら大きな樹がある天満宮との認識しかなかったのは両神社に申し訳ない。ここには天満宮と樹下神社とが並んで鎮座。拝殿・本殿の造りの大きさ・並び位置も揃えてある。昔の集落が併合された折に両社を全く似たものにしたとのこと。

この神社の山側に入ったところに「しし籬」(ししがき)があるので観に行く予定でいたが、比良駅で一休みして比良山系を見たら、山嶺の上半分が完全な雨雲に覆われ、それが降りてくる気配だ。荒天の兆しだ。今回予定のしし籬は季節、時間に関係なく見られる事物なので、無理をすることなしと判断。皆さんに了解を求め、ここで解散となった。わかれてすぐ旧161号の蓬萊の手前で、もう地飛沫のあがる激しい雨になって、中止してよかったと安堵していた。その雨も琵琶湖大橋を渡るところではパラパラ、湖岸道を南に走ったらカンカン照りの夏日。振り返る湖北の空には黒雲が広がっていた。わが近江の天候変化を、雷で始まり、小雨、豪雨、夏日と、体験した一日ではあった。

今回は天候だけでなく、企画されたみなさんのおかげで、極めて変化に富んで多彩で、愉快的なフィールドレポーター菅浦交流会を体験できた。

こんな素晴らしい良い例会を、できることなら恒例にしてほしいものと私は思っている。

また行きたい出張交流会

前田 雅子

梅雨空の下でしたが、“滋賀の奥座敷”と呼ばれる菅浦で自然と歴史に触れながら、フィールドレポーター・はしかけ出張交流会を楽しく過ごしました。博物館に集う人達はそれぞれにマニアックな領域（興味関心）を持っておられ、初めてお会いする人とも色々お話をさせてもらえたことがよかったです。交流会の感想を短文のトピックにしました。

観察眼

自由散策で、参加者の女の子がゴオニヤンマの抜け殻を見つけました。大型で、腹部が平べったくて目立つ形なのに、港の消波ブロックの隙間にあるため、保護色とも相まってなかなか気がつきません。それでも誰かが見つけると、他の人も次々に見つけられるようになるのですね。最初に抜け殻を見つけたリンちゃんがスゴイ！



やってみなければ分からないこと

須賀神社への参拝は、裸足で社殿に向かうのが慣習だそうです。素足になって階段を上り始めた男性陣は、初め「きもちいい！」と言っていたが、社前の砂利では「足つぼマッサージよりも痛い！」と悲痛な声をあげる人があり、みんなで大笑い。現代人の足裏の皮膚がひ弱であることを、あらためて教えてくれた出来事でした。因みに、私はスリッパを借りて参拝したので、それを体感できませんでした。



それイイね！

はしかけグループの「里山の会」には世話人という係があって、会員が楽しむための独自イベントを立案し、実施するそうです。イベントの内容はソバの栽培、キノコの観察など、里山に関連したものだけでなく、この前は潮干狩りに行ったとか。

世話人は、自分がやりたいことをみんなで行うための主担当者として、活動するのだそうです。10人ほどの世話人がいて、年に10回くらいのイベントがあるとは面白そうですね。

お土産いっぱい

交流会を通じて、個人的な感動や収穫をたくさん得ました。

なんといっても、時を遡るような菅浦の湖岸の景色が美しかったですし、自然界にいるタマムシを初めて見て感動しました。また、シイの巨木めぐりで訪れた神社に、アカガシがあることを教えてもらったことは、思わぬ収穫でした。

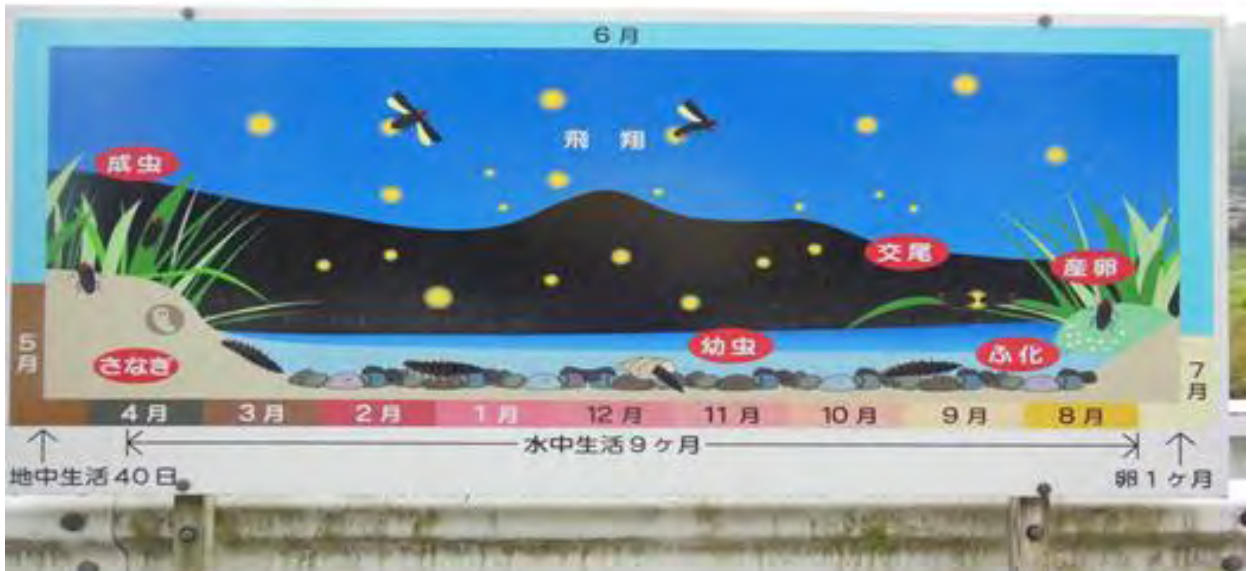
学芸員の皆さん、フィールドレポーターそしてはしかけの皆さん、ありがとうございました。



須賀神社参道で見つけた タマムシ



20日夜 ホタルが舞っていた八田部川



八田部川の岸にはホタルの生育期の説明があった



東四脚門は菅浦の東を守っている



比良・天満宮のシイの木を測る

フィールドレポーター7月～9月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予約、ご参加お願いいたします。
 なお、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

	日 時	内 容	場 所
7 月	4日(土) 10:00～17:00	びわ博フェス 2015	博物館
	18日(土) 13:30～17:00	定例会 掲示板・レポーターだより発行	博物館交流室
8 月	1日(土) 10:05～15:00	アカトンボ(アキアカネ)の調査・観察会	びわ湖バレイ (滋賀県大津市木戸1547-1)
	8日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
	22日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
9 月	5日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
	19日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室

編 集 後 記

掲示板第 79 号をお届けいたします。本号では、これまでにお届け頂きましたご投稿の他、去る 6 月 20～21 日の両日行われました、出張交流会での参加者投稿を中心に編集させて頂きました。

また、7 月 4～5日の両日には、“びわ博フェス*2015”が開催され、このイベントに我々フィールドレポーターも、“あなたもセミ博士”をテーマに、セミの親子あてクイズ、鳴き声当てクイズ、抜け殻観察、セミ折り紙づくりなどを行い、わずか 2 時間ほどでしたが、沢山の子供たち(お母さんを含めて)の参加を得て、用意した資料が足りなく、急遽追加作成に走るといったほどの、盛況ぶり、担当者はいささか“疲労こんぱい”といった状況でした。

(担当 FRS 村上 & 森)



滋賀県立
琵琶湖博物館
 交流センター
 〒525-0001 草津市下物 1091
 TEL 077-568-4811 (代) FAX 077-568-4850
 E-mail: freporter@lbn.go.jp

掲 示 板

2015 年度第 2 号 通巻第 80 号 2015 年 9 月 19 日



田んぼで羽化したアキアカネ

東近江市建部瓦屋寺町

2014 年 6 月 17 日

「田んぼにトンボが帰ってくる」

9 月 5 日、6 日と、「魚のゆりかご水田」の稲刈り体験の取材で、湖辺の田んぼに出ていました。撮影の合間、田んぼの上に目をやると、ギンヤンマ、シオカラトンボ、ウスバキトンボ、ショウジョウトンボ、アジアイトトンボなど、さまざまなトンボが飛んでいました。しかし、田んぼのもっとも代表的なトンボ、アキアカネを見ることはできませんでした。

アキアカネは多くが 6 月中旬～7 月上旬に羽化しますが、その後間もなく田んぼまわりから姿を消します。山の上に避暑に行くのです。涼しい山の上でたっぷり虫を食べて充実し、真っ赤になったアキアカネは、9 月中旬頃に田んぼへ帰ってきます。この掲示板が発行される頃には、お近くの田んぼにも来ていることでしょう。

フィールドレポーターは、8 月 1 日にびわ湖バレイでアキアカネのマーキング調査をしました。過去最高の 886 個体を捕え、左後翅にマーカーで印をして再び放ちました。このアキアカネが、どこの田んぼに来ているのかを、これから皆で調査します。

過去 6 年間の調査で、琵琶湖バレイでマーキングされたアキアカネが田んぼで再発見されたことは、まだ一度もありません。そこで皆さん！この秋は田んぼでアキアカネを追いかけ、栄えある再発見者第一号を目指しませんか？賞品は特に出ませんが、新聞やテレビが取り上げてくれるかもしれません。

フィールドレポーター担当学芸員 大塚 泰介

REPORTREPORTREPORT も く じ REPORTREPORTREPORT

1	田んぼにトンボが帰ってくる	大塚泰介	p. 1	7	老いてレポーター 元気です	久保和友	p. 7
2	2015 年度アキアカネ、マーキング調査inびわ湖バレイ	椛島昭紘	p. 2	8	FRS と相談したい件	加固啓英	p. 7
3	比良にトンボを追って	津田國史	p. 3	9	シイの実が顔をだしはじめた	津田國史	p. 8, 9
4	ツバメ観察記録	椛島昭紘	p. 4	10	玉虫 みーつけた	大橋義孝	p. 10
5	教えて下さい	加固啓英	p. 5	11	FR 活動報告	スタッフ	p. 11
6	海豚は居るか	加固啓英	p. 6	12	10/11/12 月予定・編集後記	スタッフ	p. 12

2015 年度 アキアカネ マーキング調査 in びわ湖バレイ

FRスタッフ・担当 柁島 昭紘

びわ湖バレイで8月1日(土)に実施しましたので結果を報告します。今年も昨年に引き続き琵琶湖博物館の観察イベントとして実施しました。この日は天気にも恵まれ、薄曇り時々晴れの絶好のコンディションでした。参加はお子さん1名を含む 11 名出下。びわ湖バレイのゴンドラ乗り場に集合、午前 10 時 20 分頃発のゴンドラで打身山(1103m)山頂へ。打身リフト乗り場前の広場で事前説明。八尋学芸員よりアキアカネの一生とトンボの雌、雄の見分け方など、資料を見ながら説明をしていただきました。引続きマーキング調査のやり方を説明しました。

午前の調査は打身山山頂からリフト終点の笹の平遊びの広場までリフト脇の草原を、1時間調査しました。笹の平の広場での昼食時間の約 45 分間、参加者が三々五々に自己紹介や、日頃の活動の様子など紹介しながら交流会をしました。午後の調査はこの広場からゲレンデ周遊コースの予定でしたが、開始前に場所の確認をすると、飛んでいる数が極端に少ないのです。一昨年の調査では群れて飛んでいたことを思えば様変わりです。笹やヒヨドリバナは丈が短く、地域も減って背の低い草原が広がり環境も変化していました。この場所をあきらめて、午前の調査と同じ打身リフト終点の笹の平遊びの広場から打身山山頂まで、リフト横を登りながら山頂広場周辺までを1時間調査しました。



この場所をあきらめて、午前の調査と同じ打身リフト終点の笹の平遊びの広場から打身山山頂まで、リフト横を登りながら山頂広場周辺までを1時間調査しました。

マーキング調査結果は、調査 2 時間、参加 11 名のマーキング総数が 886 頭で、今回を含め 8 回実施した内で最高記録でした。雌雄の内訳は、雌(♀)596 頭、雄(♂)290 頭でした。平均 40.3頭/網数・時間もまた今までの最高記録でした。皆さんの努力の成果です、お疲れ様でした。

記録票に記載して頂いた感想文を次に紹介します。

<感想文>

★午前中多い、午後の方が少ない。

★初めて参加させていただきました。内容を理解しないまま参加いたしましたが、子供といっしょに楽しくすごすことができました。ありがとうございました。

★とてもたのしかったです。きもちは◎◎◎でぜっこうちょうでした。

★午前中湖側の方、舞い昇る様に今までになく群れていた。

★ゴンドラ山頂駅を降りると顔に当たるくらい

群れていて期待が膨らんだ。打身リフトの両側にも群れ飛んでいた。午後ゲレンデ周遊コースに行くと期待はずれで散見されるくらい少ない。一昨年の調査とは様変わりしていた。



比良にトンボを追って

FRS 津田 國史

「とんぼつり きょうはどこまで いったやら」に倣えば、「とんぼとり きょうはひらまで いったとや」となるか。真夏の 8 月1日は、フィールドレポーター恒例のイベント「アキアカネのマーキング調査」だった。

今年の打見山頂は風がなく意外に蒸し暑かった。じつはこれがアキアカネ大量出現の要因でもあった。ロープウェイ山頂駅を出た私たちの頭上には、多くのアキアカネが舞っていて、施設の柵に張られたロープには、ずらりとアキアカネが並んで、私たちを迎えてくれた。なかには解説中の学芸員の帽子に止まって説明を聞く野次馬トンボも現れ、これまでにない状況だった。

枝先などに止まったのを狙って振った網を躲けて飛び立っても、なぜかまた戻る習性があるので、同じ枝に注目していると労せず採集できる。

張られたロープなどに間隔を置いて並んでいるのを狙う時は緊張するので一番楽しい。



ロープに止まったアキアカネ 大家学芸員撮影

一網打尽とはならないが、ロープの向きに沿わせて、ロープ際より少し上を素早く振ると効率のよいことが解った。

手近の個体は網に気付いて飛び立ち、網から遠い位置の個体は元の位置からすでに飛び上がっている。だから網は水平ではなくやや上げ気味に振ると何頭かを一度に採集しやすいことを今回はじめて学習できた。

飛んでいる個体を狙っての網振りは、いかにも“やってます”と、トンボとり風ではある。網を振り回す行為は絵にはなるだろう。しかし、じつを言うと、これは労多くして実入りの少ない行動だ。アキアカネ(トンボ)の飛翔は、羽ばたきがこまやかで、四翅の動きはとてもひとくちでは表せない。蝶に比べ、たいへん複雑で敏捷な動きでうまく躲かれる。

遙か向こうの打見山北斜面で、採集者の姿はよく判らないのに、白い網がゆっくり大きく振れるのを望み、あれはアサギマダラを追っているなど見ていた。

採集は彼らの好んで集まるところを早く見つけ、そこに陣取って網を振るのが最良だ。毎年一番多い記録を残す M さんがそうだ。水を求めて集まる彼らの習性が判っているので、まず、風の当たらない陽の当たる水場に集まる集団を見つけ、そこを自分の猟場に、あとはほとんど動かないのが効率の良い採集者の行動だ。

トンボは大きな水場より、ほんのわずかな濡れ程度の滲みが好みかと思われるが、どうだろう。

今年は例年になく大量のマーキングが出来たので、秋に再会?の確率が少し上がったのではと期待が膨らんでいる。

【ツバメの巣の観察、於草津市の旧東海道草津宿商店街周辺】

投稿日 [20150907]

草津市 椋島 昭紘

春になると毎年飛来するツバメですが、最近減ってきていると聞きます。草津市の旧東海道筋ではどうでしょうか。旧東海道の旧草津川に架かる草津川橋から旧草津本陣前に出て、そのまま草津宿の商店街を南方向へ行くと立木神社に着きます。この約 750mの商店街で、ツバメの巣作りや子育ての様子を春先の桜咲き始める4月初めから真夏の 8 月まで、散歩をしながらメモしてみました。この場所は 2007 年フィールドレポーター「ツバメ調査」で調べた所です。その後 2011 年、2014 年と観察してきました。旧草津川はフィールドレポーター掲示板の投稿でも紹介されているように公園整備工事が昨年末から本格化しています。その影響も気になるところです。

2015 年(今年)、3 月 26 日旧草津川の上空を飛び交っているツバメを発見、この日が私の初見です。昨年より1週間ほど早い初見でした。その後、4 月 19 日に1ヶ所巣作りしている所を見ました。商店街の軒先には巣作りしやすい様に棚が準備されている所が多いです。きっとツバメの飛来を楽しみにされているのだと思います。

初見した巣は 5 月 19 日に巣立ち前の子ツバメを見ました。この間約1ヶ月でした。更にこの巣は 6 月初めに 2 回目の子育てが始まり、6 月の末には巣立って行きました。3 回目の巣立ちが 7 月末に見られ今年は終わりました。よほど居心地の良い巣のようです。ここ以外でも2回巣立って行ったところが2ヶ所ありました。

今年見つけた巣は 18 ヶ所で、2007 年調べに匹敵する多さでした。そして 8 月には見られなくなり今年のツバメは飛び立ってしまったようです。

2007 年頃旧東海道宿場町商店街にはアーケードがありましたが一昨年頃から撤去され、見通しが良くなったので、減るのではないかと心配しましたがその影響はなさそうです。また旧草津川公園化整備工事の騒音もあって心配しましたが、昨年よりも多く戻ってきてくれたのにはホッとしました。商店街の方々の心遣いが通じたのでしょう。



表 2007 年～2015 年の草津駅前商店街ツバメの巣観察記録

旧中山道側	旧東海道の東側にある約 500mの商店街です。2007 年から観察してきましたが、2011 年は半分位に減り、2014 年、2015 年見つかりません。
旧東海道側 (上の写真)	2007 年に比べ 2011 年ほぼ同じ位見つかりました。しかし2014年は 1/3 位まで減りました。2015 年(今年)は 2011 年頃と同じ位に増えて、18 ヶ所見つかりました。

【教えてください】

投稿日 2015年7月15日

彦根市 加国 啓英

いささか、この投種の趣旨から外れるかとは思いますが、広く知識を持たれる学芸員さん達の御教えを頂きたく、投稿しました。

1. ヒルガオ、コヒルガオ、ハマヒルガオ等は通常一年草とされますが、熱帯アメリカ原産のサツマイモは原産地では多年草なのですか。
これらを沖縄等で栽培しても多年生育は出来ませんか。
2. アンデス山脈の標高3000m付近に生育するアカザ科の植物、キヌア(quinua)は非常に栄養価、栄養バランスが良いと聞きますが、滋賀県内の放地農地での栽培には向かないでしょうか。
これを添加した麺類等の食品を開発して地場産業を興せないでしょうか。
3. 日本全土で通用する放蝶の追跡の為のマーキングルールは作れませんか。
数字ですと文字数 n で 10^n ですがアルファベット大文字だけで 26^n ですから団体名676が2文字で済み、イベント名に2文字を充当し、詳細はインターネットで検索可能とするのです。
琵琶湖博物館での発案の検討を御願い致します。
4. この所テレビで取上げられているアムールヒョウとはヒョウ、ウンヒョウ、ユキヒョウの様に別種なのですか。
あるいはベンガルトラ、アムールトラの様な地域変異なのですか。

【海豚は居るか？】

投稿日 2015年7月25日

彦根市 加固 啓英

私はいささか認知性の自覚症状の有るオーバー3/4 世紀の末期高齢者です。掲示板へ投稿した事を忘れ、草案を投函してしまい同様の文障を2つ掲載させてしまい誠に申し訳御座居ませんでした以後気を付けますのでお許し下さい。

沿岸捕鯨の追い込み漁でのイルカ漁が非難され JAZAが手を引いた今後、日本の水族館へのイルカの供給はどうなるのでしょうか。
又、欧米の水族館には打つ手が有るのでしょうか。

< 以下は私案です。 >

海岸に乗り上げ、ボランティアが総出で海に戻すイルカの大群のニュースを年に数回目、耳にします。ボランティアが汗水垂らして海に戻しても又すぐに陸に乗り上げてしまう個体も有るとも聞きます。これはイルカの進化・淘汰も学修も追い付けない今年の変化によるのでは無いでしょうか。

私が思うに 日本発で急速に世界中の漁業界に広まった魚群探知器の怪音に、イルカがパニックを起こしているのでは無いでしょうか。

密度の高い水中の音の伝播は空中とはけた違いの筈ですから船影の見えない遠方からでも影響が大きいかと思えます。

そこで対策案ですが、JAZAと無縁の団体が港湾や漁港としての立地条件を満たさない小さな入り江を漁網で仕切り、ドルフィンコーラルとします。

陸に打ち上げられたニュースの度に水槽を備えた船が出向き、全てのイルカを回収し、助けられる個体は海からドルフィンコーラルへ搬入します。

助からない分は誰はばかる所なく鯨肉として食品化します。
この回収船は日本沿岸だけでなく海繋がりの近場の外国までもイルカの回収に出向します。

加固 啓英 (かこ よしひで)
無職・男性・76 歳

【老いてレポーター 元気です】

投稿日 2015年7月29日

久保 和友

博物館が出来る前は 草津市内の烏丸半島は子供たちの広い遊びの場所でした。
小川にはメダカがいっぱいいて、タンポポも 曼珠沙華も 麦秋も お寺の入相の鐘がなるまで 学校の手提げや肩かけカバンを家にほうり投げて 野原を駆けまわっていました。
昭和の話をして、孫たちも聞いてくれない時代です。
そんな思いで タンポポはじめ レポーターで勉強させてもらっています。

別紙で、あおばな(青花)に一生を捧げられた 中村 繁男 さん(86 歳)の物語が「ロトス」という無料誌にのっておりました。博物館の展示でもあまり詳しくされてないので参考にと添付しました。

【FRS と相談したい件】

投稿日 2015年7月25日

加固 啓英

フィールドレポーター スタッフの方と御相談したい件です。

私は琵琶湖と正反対の海跡湖で最大深度 11.9 m の海跡湖で海との関係の深い霞ヶ浦に接する土浦市の出身です。

フィールドレポーターの調査範囲はどこまでですか。
日本第二の湖と連携を計っては面白くは無いでしょうか。
(同窓会のネットが活用出来るかと思います。)

過去に行った調査の内、有意義な物数件を毎年調査項目に指定しませんか。
多年度の蓄積データからは、何か発見が有りそうに思えるのです。

【シイの実が顔をだしはじめた】

投稿日 2015年9月8日

FRS 津田 國史

8月も下旬の23日、私の集落の公園にあるシイの木を見に行つた。

午後の日差しが葉を茂らせたシイの木に当たっている。しかし葉陰は暗いので写真を撮るには条件が良くなく、やぶ蚊にも悩まされていた。

集落にシイが2本あり、その下はよく通っているのに全く気付かなかつたのを恥じた。こんな近くで、しかも眼の高さで枝葉に触れられるシイの木があるのに観察しない手はない。これまでの不明を挽回するため定点観察の対象にしている。

旧野洲川の南流左岸堤が、改修で取り払われ、新河川の堤外(旧野洲川の河床)に出来た改修記念公園に植栽の木だ。どちらも旧堤防に植わっていたのかどうか解らない、ここが公園になった折に植えられたことは確かだ。

もう20年は経過しているが、枝ぶりから見るとどこかで植栽されていた様子だ。

大きく枝を広げるシイの木特有の樹形で、樹高はどちらも5m未満だ。

東の木は、地上50cmで枝が四方に張り出してこんもりと樹形が出来ている。

西の木は地上1mくらいから枝が出て、やや背高で枝のわりには葉の繁りは少ない。

東の道路際の木は朝日が良く当り、西のグランド脇の木も西日をまともに受ける。

どちらも陽射しには恵まれた位置にある。

東西に30mほど離れているが、大きな違いは実の成りようだ。

東の木は多く、西の木は少ない。東の木には、どの枝にも鈴なりに実が付いているのに、西の木には殆ど実が見られない。これは樹種の違いかな。

春先の開花は西の木が多く、シイの花特有の黄金色を誇示して、私にシイの木の存在を教えてくれた木だ。



東の道路際の木E 実が多く付いた
N 35°05'41.02" E 135°59'34.91"



西のグランド脇の木W 花が多かった
N 35°05'41.76" E 135°59'33.64"

シイの (^o^) いろいろ

8月23日と9月7日に見たシイの実。E(東の木)とW(西の木)とでは葉の繁りが全くちがひ、結実もまた大きく異なる。樹種の違いだろうか？

(それぞれにシイの(^◇^)の色が違います。これはPCでないと識別できないと思います。)



E-1 8/23 青い種子が出た



E-0 9/7 落ちていた実の種皮が割れている



E-2 8/23 茶色い種子が出ている



W-1 8/23 ほとんど種子が付いていない



E-3 9/7 青い種子が大きく出ている



E-5 8/23 黒い種子が出ている



E4 9/7 小さい種子でも色つき



E-5 9/7 上の写真と同じ種子。
茶色に変わり、割れ目が。

米原市在住のフィールドレポーター大橋義孝さんからのメールです

【玉虫 みーいつけた！！】

米原市 大橋 義孝

琵琶湖博物館 榎永さん

こんなありふれた内容でよかったですらどうぞよろしく。

また近々、茸で面白いのを見つけたので送ります。今はちょっと他にすることがあるので……



ヤマトタマムシ 大橋義孝さん 撮影

8月22日 12時半ごろ、仕事中に山裾の住宅地を通りかかったところ、アスファルト舗装された駐車場に4～5cmくらいで色のきれいな物がころがっているのが見えました。

何だろうと近づいてみたところ昆虫図鑑か、標本でしか見た事のない玉虫でした。

珍しいから携帯で写真を撮っていたらそれがいやだったのか、何処かに飛んで行ってしまいました。

宅地化が進んで自然が減りつつあるけれど、米原市はまだまだ大丈夫なようです。

大橋様

琵琶湖博物館 榎永 一宏

メールありがとうございます。

昨日まで、四国に調査に出ています、お返事が遅れ失礼しました。

このヤマトタマムシはきれいな虫ですよ。

米原ではまだまだ大丈夫そうですね。

このヤマトタマムシは、夏の暑い日の暑い時間にエノキなどの大木の上を飛ぶので、普段は人の目になかなかつきません。この日は、何かの拍子で地面の上で休憩でもしていたのでしょうか？

私も偶然、四国での調査中にヤマトタマムシを見つけました。この時はなにか大きい甲虫が飛んでいるように見えたので、追っかけていくと、看板にとまったので、捕まえることができました。

フィールドレポーター 活動報告

定例会は原則として、毎月第1土曜日、第3土曜日に博物館の交流室で行っています。掲示板の最終ページの予定表をご覧ください。その他行事はその都度案内しています。お気軽に参加して下さい。2015年7月から2015年9月までの活動内容は次の通りです。

月	日(曜)	場 所	参加者	主 な 内 容
7月	4日(土)	会議室	80名	① びわ博フェス2015 あなたもセミ博士
	18日(土)	交流室	10名	② アキアカネ調査・関連準備
8月	1日(土)	打見山	11名	① 比良・打見山・アキアカネ・マーキング調査
	8日(土)	交流室	6名	② 次回調査項目検討
	22日(土)	交流室	7名	③ 次回調査セイタカアワダチソウ決定・担当者選定
9月	5日(土)	交流室	7名	① アキアカネ観察会、日程場所検討
	19日(土)	交流室	7名	② 掲示板80号印刷発行・セイタカ調査票印刷・発送



2015年8月1日 比良・打見山頂ロープウェイ駅東斜面でアキアカネのマーキング調査 大家学芸員撮影

フィールドレポーター 10月～12月 予定

次のとおり計画しておりますので皆様のご予定、ご参加をお願いいたします。
 なお、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

	日 時	内 容	場 所
10 月	3日(土) 12:45～17:00	アキアカネ調査	博物館 交流室集合
	17日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館 交流室
11 月	7日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館 交流室
	21日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館 交流室
12 月	5日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館 交流室
	19日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館 交流室

おことわり;上表の博物館とは琵琶湖博物館のことです。

編集後記

暑かった夏がいきなり秋になり、こんどは秋の長雨で各地に水の被害が続出しています。
 みなさんの所は大丈夫でしたでしょうか。私の知る所で、春に水がなく田植えが出来なかった地域があります。多すぎるのも少ないのも困ります。ほどほどに願いたいものです。

次回の調査はセイタカアワダチソウです。かつて至る所で見かけた外来種が、いまどうなっているか
 前回調査と比較します。みなさんの報告をお待ちしています。

アキアカネの観察会は 10 月 3 日、大津市伊香立南庄町です。夏の比良・打見山でマークした彼(女)
 らとの再会を願い、当日の晴天を祈念しています。みなさんのご参加をお待ちしています。

掲示板の投稿もぜひお願いします。身の回りのこと、こんなのを見つけた、おもしろい写真が撮れたな
 ど、お気軽に投稿して下さい。

担当 FRS 津田



滋賀県立
琵琶湖博物館
 交流センター
 〒525-0001 草津市下物 1091
 TEL 077-568-4811 (代) FAX 077-568-4850
 E-mail: freporter@lbm.go.jp

掲 示 板

2015年度第 3号 通巻第81号 2016年 1月 9日



フキノトウ

生物季節の異常

あけましておめでとうございます。もっともこれを書いている時点(12月19日)では、年末の大量の雑務に追われており、無事に年を越せるのか不安でいっぱいです。

さて、この冬は寒くなるのが遅く、生物季節の遅れや異常が目立ちました。

11月22日に甲賀市の「鹿深夢の森」へ出張した際、駅への帰り道を誤って、甲賀市甲賀町の丘陵地帯を2時間ほどもさまようことになりました*。するとそこには、タンポポの花園が広がっていました。折しも小春日和、今は春かと錯覚するほどでした。咲いていたタンポポの写真を撮り、今春の調査ですっかりタンポポに詳しくなったFRSの前田さんに見て頂きました。すると、よく秋に咲く外来種の他に、おそらくシロバナタンポポ、キビシロタンポポ、カンサイタンポポの在来3種とのこと。なお前田さんは翌週、私がさまよった道筋をたどって、上記3種が咲いているのを全て確認されたそうです。すごい行動力！

他にも、屋外で飼育しているナゴヤダルマガエルが11月中旬まで鳴いていたり、今秋に皆さんが調査されたセイタカアワダチソウの花が12月10日頃まで咲いていたり、果ては12月14日に高松から早くも梅の便りが届いたり・・・。

こうした生物季節の異常についてお気づきのことがあれば、小さなことでも結構ですので、掲示板に投稿していただければ幸いです。電子掲示板への投稿もお待ちしております。

<http://www3.rocketbbs.com/601/gonzalez.html>

*私は運転免許をもっていません。この日も駅からの徒歩でした。

フィールドレポーター担当学芸員 大塚泰介

***** もくじ *****

1.	生物季節の異常	大塚泰介	P1	7.	もどってくれたヤモリ	草津家猫	P8
2.	フィールドレポータースタッフ 大募集	大塚泰介	P2	8.	この花を見る目が変わった	津田國史	P9
3.	2015年度 秋のアキアカネ調査の報告	椛島昭紘	P3	9.	ヤモリとクモ 1	津田國史	P10
4.	我が家のタンポポ戦争	近江心気郎	P4	10.	お知らせ 2題		P12
5.	終わらない夢・秋日和	久保和友	P6	11.	活動報告と今後の予定		P13
6.	赤トンボ・アキアカネが減っているか？	椛島昭紘	P7				

フィールドレポータースタッフ 大募集

2016 年春は「飛び出し坊や」調査！

大塚泰介



現在、フィールドレポータースタッフは、2016 年春に飛び出し坊やの調査を行うべく、準備を進めております。

飛び出し坊やは滋賀県八日市市（現 東近江市）が発祥の地とされ、現在でも設置数は滋賀県が日本一と言われています。地域の団体（交通安全協会、社会福祉協議会、町内会、自治会、PTA など）が自発的に設置しています。

飛び出し坊やの調査を「人間と湖のよりよい共存関係」を目指す琵琶湖博物館が行うことの意義づけについて検討する中で、1つの仮説が浮上してきました。飛び出し坊やの分布と多様性に、地域の協働の力（社会関係資本）が、強い影響を及ぼしているのではないか、というものです。

一口に地域の団体による自発的な設置と言っても、その実態は様々です。スタッフの身の回りの事例だけでも、市や交通安全協会が調達した飛び出し坊やを自治会が配置しているだけの場合、交付金が下りるが自治会の独力では調達しきれないので地元大型店舗の協力を得ている場合、交付金を活用して町内会・自治会や PTA、あるいは子供たち自身が自作している場合などがあるようです。

すると、飛び出し坊やの設置密度が、地域の協働の力の指標になる可能性があります。また、町内会・自治会や PTA の関与が大きい場合ほど、飛び出し坊やは基本型（0 系と呼ばれる）から外れたものになりやすく、また地域内での多様性が高くなるのではないかと、という予測が立ちます。

もちろん本調査では、飛び出し坊やの写真を収集・整理し、その分布と多様性を明らかにすることを主な目的にするつもりです。しかしその結果は、上記のような社会的背景の分析に裏打ちされてこそ解釈可能になり、当館の理念に即した研究成果になると考えます。

この調査の企画運営に関わるスタッフになって下さるという方、いらっしゃれば、ぜひとも電話またはメールでご一報ください。特に学生諸君！大学の卒論・修論のネタにもなりますよ！

ご連絡をお待ちしています
TEL 077-568-4811（代）
E-mail freporter@lbm.go.jp
フィールドレポーター担当 大塚 まで



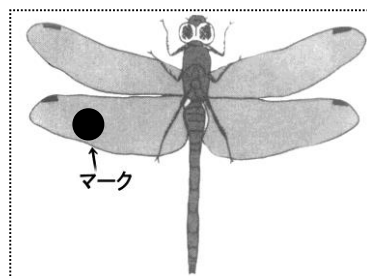
2015年度 秋のアキアカネ調査の報告

ー稲刈りの終わった田んぼの周りでトンボと遊びましたー

フィールドレポーター 椋島昭紘

8月1日(土)、びわ湖バレイでマーキングしたアキアカネ(右図)が里の田んぼや野原などで見つかるでしょうか?もし見つかったら大トピックスです。

10月3日(土)、秋のトンボ調査をフィールドレポーター主催で、大津市伊香立南庄町で実施しました。ここは昨年約1時間で800頭以上見つかったところで、びわ湖バレイから南の方向に約8 km(平面地図上)離れていますが、マーキングされたトンボが飛んでくる可能性は大いにありますと予想できます。



当日よく晴れて、微風の絶好のハイキング日和でした。融神社(下に余談)に集合して、14名の参加者で、午後だけの約1時間調査しました。稲刈りの終わった田んぼやため池の回りの柵や草木の枝先に手に取るように止まっていた。下から見ると青空に映えて赤や朱色、茶色のトンボが目飛び込んできました。参加された皆さんは三々五々広がってトンボを追いかけて、楽しんでいました。



参加者の調査記録を集計した結果は合計で604頭でした。昨年より少なかったのですが、多く見つけることができ良かったです。ただ、残念ながらマーキングされたトンボは今回も見つかりませんでした。ご参加の皆さんお疲れ様でした。

フィールドレポーターの皆さんの自宅近くで見つかるかも知れませんが、トンボ調べをよろしくお願いします。



【余談:融神社は平安時代初期、嵯峨天皇の皇子として生まれた源融(みなもとのとおる)とその母・大原全子(おおはらのぜんし・またこ)を祀る神社です。】

我が家のタンポポ戦争

2015年11月21日

近江心気郎

滋賀県には琵琶湖がある。

私の母は長浜出身で家内(嫁はん)も長浜である。私自身は京都の田舎生まれだから滋賀と京都の雑種である。

小さい頃から田舎の長浜を行き来し、結婚して大津市膳所の住民となって40年になる。琵琶湖から離れる生活はもう考えられない。何でもと言えないが滋賀県についての基礎知識はそこそこ有ると考えていた。

そんなときタンポポ調査を引き受けた。フィールドレポートというのは初めてである。タンポポとは黄色で春に咲く花であって最後は丸い綿毛がふわふわ飛んでいくという知識しかない。自信のなさも手伝って、正直気合いが入らなかったのであります。

ところが始めてみて、のめり込みました。久しぶりに頑張りました。自分でもようやくやったと思います。その原因はどうやら我が家のタンポポ戦争でなかったか？としか考えられないのでその顛末をレポートいたします。

先ずスタート時。

嫁はんに「タンポポの調査依頼を受けた」という。返ってきた言葉「東京の神宮か代々木が外来で問題になってるらしい。そんなん調べたら」と若干視点が違うが情報量が多い。「マアしっかりやり」と言葉にでないけど軽いなされた感じでいささかムカツときた。

動機はチトおかしいが反作用でやる気になった。

初日。

我が家の前の川の土手。なんとカンサイタンポポの集団。図鑑と照合、間違いなし。外来やセイヨウやと氣勢の上がらない情報ばかりのなか、一番身近に在来があった。川の上流もそうだし、近くの山手の公園はカンサイばかり。テンション上がりっぱなし。

嫁はんに言います。「膳所はカンサイやで。セイヨウ違うでニッポンやで」と。

返ってきた答え「そらよかったな」一言。もっと感激せえ。モー。

第2回調査

それなりに見る目が出来てきた。カンサイ見つけて喜ぶだけの視点でなく花の形、花粉を見る余裕が出てきて我ながら成長したと自負する。

そんな中シロバナタンポポ発見。万歳したくなる。なんだこの心のトキメキは。

子供がご褒美貰ったような気持ちで家に帰って嫁はんに報告。見せながら。

「シロバナタンポポ膳所にあった。こんなん見たことないやろ」

返ってきた答え。「むかしみんなで突然変異や云うて採ってたわ」

“知っとるんかい！” わしの舞い上がった気持ちをどうしてくれるんや。モー

そんなこともあったが調査は面白くなってきた。

旧東海道を行ったりきたり。国道1号線も歩いた。道端にも結構生えているのが分かったがほとんど外来か雑種であることがわかった。

そして最後にレポートをまとめようという段階でとても茎の長いタンポポ発見。

30 cmはある。住宅内の田んぼの外で深い溝のため採取しにくかったが50 cm位のものもあった。これはすごいまたまた興奮。

家に帰ります。「見てみ！こんな長いタンポポやで！新種かも知れん？」

返ってきた答え。「タンポポは長いもんや」「何を興奮しとるん」

バーン、バーン！全身に銃弾浴びた感じでした。降参。何を言うても通じん。

何でこうなるの。最初に戻って滋賀県には琵琶湖があるともう一度考える。

嫁はんの生まれ育った長浜と膳所は南と北の隔たりが在り琵琶湖というとてもない大きな溝の西と東にある。生活環境は人間の知恵で均一化されていってもその土地の生物環境は世界が違うという前提を見落としていた。

近所に方に言わせると「長浜は遠いなー。70 kmか。旅行の距離やで」となる。

母が言っていた昔話を思い出す。子どものころ、たぶん長浜の神田の浜から今津方面を見て「あそこがアメリカやなー」と聞いたそう。母の母は「そうやで」と答えたという。大正時代の話である。生物にとって今でも展開するに広過ぎる琵琶湖であろう。

植物たちは好き好んで急激な近代化に迎合しようと思っているはずがないと思う。

その土地で一番住みやすいようにエネルギーを使っているのに、人間社会の勝手気ままに振り回されるのを余儀なくされている。

私は知らなかった。滋賀県北部はセイタカタンポポの領域で家内はそれしか見ていなかっただけの話であった。対抗意識を持っていると決めつけ、タンポポ戦争なりと勘違いをした私のお粗末な話でございました。

シロバナタンポポは確かにあったのであろう。突然変異なんて言葉を使えるのは家内が中学時代であろうから1960年ごろの話だと思う。

タンポポについては良い経験をさせてもらいました。

来年の春どうなっているかももう一度新しい気持ちで観察したいと思います。

尚この投稿は家内の了解を得ていません。勝手なことをグドグドと書いてなんて言われるのが目に見えますので、どうか他言を控えてくださいますようお願いいたします。(完)



終わらない夢・秋日和

投稿日 2015年10月31日

草津市 久保和友

－1－

今年の夏の終り、知多半島に上陸し琵琶湖を斜めに北上し、私が住む草津が台風の目に入ったのには驚いた。テレビでは大型台風 18 号は通過している名古屋市内の荒れ狂うさまは何も伝えない。正午、かんかん照りの陽がさし青空が美しい。庭のひまわりの花が風がないので笑っているように見えた。約1時間、嚴重にしめた雨戸を開けた。猫が何事かと私の顔を見て笑っている。15 時、曇って小雨が降り出した。テレビは台風は日本海に出て沿岸沿いに北上。あとでこの台風が鬼怒川を決潰させた。私は 80 年生きてきたが台風の目と知ったのは始めて。驚いた。

－2－

十月に入って秋日和が 20 日ほど続いた。野路に住む友人から、市の広報に出たようだが玉川小学校の民具資料館で頼めば見せてくれるというのででかけた。人間がはく草鞋は昭和に生まれた私は小学校へ通うのによくはいていた。殆んどは下駄ばき、着物姿、肩かけ鞆で通学したから。牛の草鞋は農耕用の牛にはかせる靴です。玉川学区では「ふるさと玉川 民具を照らす会」があつて貴重な教材として暮しの知恵の発掘を進めておられるのを知り勉強になりました。京都の時代祭などの牛のひずめを守るため 4 本の足すべてに装着している話も聞きました。

* 草津市の広報 2015 年 10 月 1 日号の P. 22 に、「牛の草鞋わらじ」が掲載されています。興味のある方はそちらをご覧ください。広報は草津市のホームページでも見ることができます。

－3－

先号掲示板 2 号にも書きました旧草津川(市内を流れる 6 キロの堤防のある天井川)跡地整備事業、公園化など来年 4 月一部完成の予定で大型機械が入って工事中なので危険で一般市民・観光客は見せてくれません。完成イメージ図が発表*されています。春 4 月、桜の季節が楽しみです。

* 草津市広報 2014 年 8 月 1 日号の P. 2 に掲載されています。

赤トンボ・アキアカネが減っているか？ 草津市内の2カ所で調べてみました

【投稿日：2015・12・21】

草津市 椋島昭紘

秋の日差しに映える赤トンボ・アキアカネが稲刈りの終わった田んぼやため池の周りで群れ飛ぶ風景、この慣れ親しんだ風景が見られない処が増えているという報告を近ごろよく目にします。例えば、2015年10月21日付の朝日新聞の記事によると、『日本を代表する赤トンボ・アキアカネが最近、地域によってはほとんど見られなくなってきた。継続的な調査や、保護する取り組みが始まっている。』という。そこには、レッドリストに掲載した府県として、朝日新聞がまとめた表に、大阪府が2014年度に準絶滅危惧、兵庫県が2012年度に要注目、三重県が2014年度に準絶滅危惧となっています。滋賀県の状況が心配になってきます。

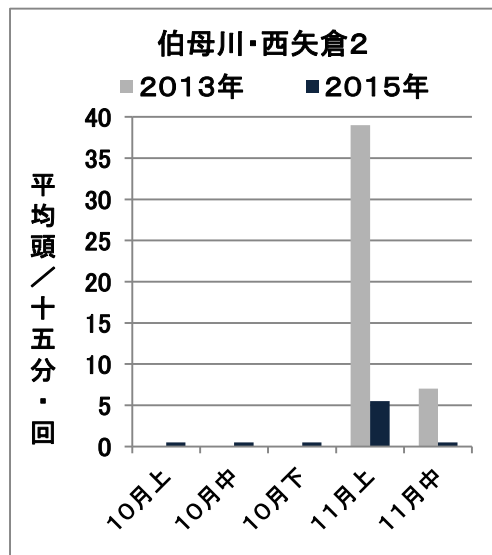
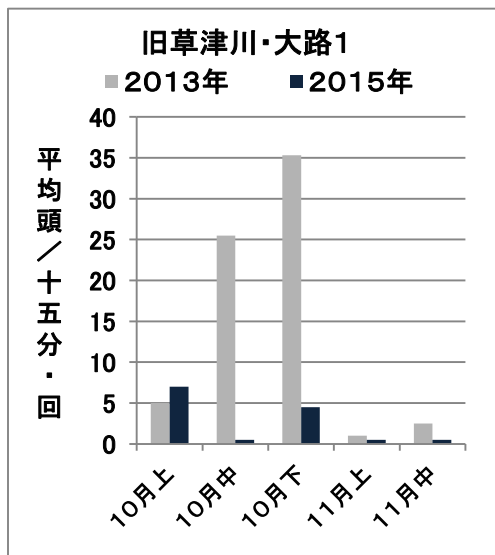
フィールドレポーターでは“アキアカネのふるさと探し”として、8月に夏のびわ湖バレイでのマーキング調査を2008年から今年・2015年まで7回継続して実施し、そして、秋の麓での調査も実施してきました。今年の結果は、夏の調査結果が9月発行のフィールドレポーター掲示板に、秋の調査結果が今回発行の掲示板に掲載されています。この秋、大津市伊香立南在町の調査にも参加しましたが、秋の日差しに映える赤トンボが稲刈りの終わった田んぼやため池の周りで群れ飛ぶ風景を見ることができて、ほっとしました。

草津市内の自宅近くでは散歩しながら、止まっている赤トンボの写真を撮ったり、飛びまわるトンボを目で追いながらマーキングされたアキアカネをさがしてきました。見つかりませんが、並行してその数をメモした結果を図の1、2にしてみました。旧草津川公園(大路1丁目)と、三池運動公園近くの伯母川の頓連池(西矢倉2丁目)での結果です。結論から言いますと、2年前に比べて減りました。寂しいかぎりです。

環境の変化では、旧草津川の公園整備工事によって大路1丁目側の堤防改変によりサクラの木、ムクノ木、エノ木、クワの木などの大きな木が切倒され風除けがなくなりました。立入禁止になっていますが、ロープまで近づいて探しても赤トンボが減ってしまいました。

一方、ここ2年間で見たところ環境変化がない西矢倉2丁目の頓連池横の伯母川土手の間でも2年前に比べ本当に少なくなりました。

たった2ヶ所の気まぐれな調査ですが、草津市内で赤トンボが見られなくなる時が近づいているのでしょうか。もう季節は移ろい冬になりましたが来年も赤トンボに注目していきたい。



もどってくれたヤモリ

FRS 草津 家猫

わが家のベランダに、世話を続けて 40 年あまりの盆梅がある。いつの頃からかこの梅鉢と、ベランダの壁との隙間を自分の領域にして、一匹のヤモリが住みついている。植木に水やりをするときに姿を現すこともあって、彼のつぶらな瞳をみるのが楽しく、水やりの度に今日は出会えるかと期待するが、たまにしか会えない。

ヤモリと言えばスリガラスに張りついているのを見ることはあるが、どういうわけかクリアガラスでは見かけない。わが家のベランダには緑が多く、リビングも夜中 12 時頃まで明るい。居ながらにして、ヤモリの行動、捕食行為を観賞できる絶好のステージなのに、わが家のクリアガラスにはなぜか登場してくれない。これは餌の蛾類の出現に左右されるのか、それとも恥ずかしがり屋？

ところが今年2月から、わが家のあるビル全体の大型修復工事がはじまった。ベランダは修復の対象なので、置いてあるものは全て撤去することになり、植木は、7階にある庭園に預けることになった。

その日、盆梅を動かすと、遊びに来ていた彼女は逃げ、彼は壁に張りついて、おのが身のふり方はどうすれば良いのか思案しているように見えた。このまま私が彼を囲って飼育するには餌の確保が困難なので、彼の飼育は諦め、成り行きに任せることにして植木群を全て庭園に移した。

6 月下旬、梅雨の最中によやくわが家の階の修復が完了して、植木はまたベランダに戻すことが出来た。だが、ヤモリは現れなかった。もう彼はわが家の植木群から他に移って、どこかで暮らしているのだろうと諦めていた。

7 月初旬、水やりの折にひょっこり出てきたヤモリがいた。蜜柑の鉢から右前脚と顔を出し、こちらを覗くように見上げるが逃げない。まるでお久しぶりとでも言いたげだ。植木と一緒にもどっていたか。諦めていた彼に？再会できたのが嬉しく、これでまたわが家のメンバーが揃ったと喜んでいる。でも、はたして前に居た同じ個体なのか、別のヤモリなのか。体色は前と変わらない。私には前の彼のように見える。

せっかく修復出来て見違えるようになったベランダ。ここをいつも綺麗に保つには蜘蛛除けスプレーや、虫除けでガードすればよいのだろうが、それではこのヤモリが安心して暮らせる環境を保てない。わが家にもどってくれた彼のために、駆除剤は使わないと決めた。

彼が捕虫するところも見たいし、彼とはもっとしばしば(^o^)を合わせたいと思っているので。

この花を見る目が変わった

FRS 津田 國史

秋の屋外で、黄色を目印に探せば、いたる所でセイタカアワダチソウが見つかる。
10月19日午前、JR琵琶湖線の守山—京都間の車窓から、注意して線路際のこの花を探っていた。結果、この花を見ない駅区間は無かった。かつての鉄道草という文言が浮かんだ。必ず線路際のどこかにはこの黄色い花を見た。背丈には高低があり、それは整地、草刈が行われてから今日までの期間に比例していると見た。

11月1日、湖北への道すがら、車から見える左右10メートル位で、100mの区間と、1000mの区間とで、全くセイタカアワダチソウを見ない区間があるかどうかを、その日の課題にして走った。100mでは全く見ない所がちらほらあったが、1000mを走っても、黄色いセイタカアワダチソウを見ない区間は全く無かった。

琵琶湖に注ぐ野洲川・日野川・愛知川・犬上川などの河川敷には、必ず黄色い花が風に揺れていたし、橋のたもとや堤防の法面には決まってこの花があった。

私がいつも往復する道の片側には、いま文字通り背高なアワダチソウの行列が私を見下ろしている。この少し先ではセイタカアワダチソウが、稲刈りの済んだ田んぼを囲って、長方形の黄色い塀を見せてくれる所がある。

11月10日、長く続いた秋晴れが、8日～9日と雨になった。そのせいだろうか。セイタカアワダチソウの花の色がくすみ、鮮やかさが無くなった。わが家の庭の花もすっかりくすんで褐色になっている。気にかけていると彩度が落ちて、どの花も先端から白味を帯びだした。花期の終わりか。

JR 琵琶湖線の南草津駅と瀬田駅との間、琵琶湖側脇の田んぼ。ここの休耕田群を占有して咲く30～40cmの高さの揃ったセイタカアワダチソウの花は、密度があるので絨毯が敷かれたように見える。黄花を敷きつめた田んぼ。黄色で太く隈取る畦。ヒコバエの青稲。鍵型に走る枯草の畦道。などが創る、モンドリアンのコンポジションさながらのたんぼは、京都に向かう私の眼を楽しませてくれた、でっかいキャンバスでもあった。

今年の秋は特に晴天が多かったからか、10月以降に伸びだした茎は、10cm余りの背丈でも黄色い花を付けて、背の高い灰褐色になった老花と共に師走の風に揺れている。

これは初夏の頃に伸びる茎には全く見られない現象だ。何がどう違うのか、このセイタカアワダチソウの不思議をさぐってみたい思いを募らせている。

かつてのセイタカアワダチソウ調査のおりには、この花を目の敵にしていた私のなかで、時の経過につれて変化が始まっている。今回の調査で、この花の咲く時期と気候、温度・日照時間などの関係を、もっとしっかり見ておくべきだったと悔やんでいる。

ヤモリとクモ 1

FRS 津田 國史

9月下旬の昼前、わが家の洗面所の床の隅で、ヤモリがしっぽを真上に挙げてじっとしている。しっぽを真上に挙げるのは壁面を這っているときに見かけることがあるが、平面で中空にしっぽを挙げているのを見るのは珍しい。

近寄ってみたらクモの糸に絡まっているためで、自分の意思で挙げているのではなさそうだ。ヤモリがしっぽを挙げるのを、私はある期待で見詰めることがある

夏の宵、室内の灯が点くと、勝手口のガラス戸に蛾が寄ってくる。これを狙ってヤモリがやって来て蛾を捕えようと身構え、眼で蛾を追っている。蛾の動きが止まるのを見定めると、そろりそろりと接近するが、獲物までの距離はしばらく一定の間隔を保ち、それ以下に接近することはない。

ヤモリの顔を覚えているわけではないが体形から、どうやら毎晩同じ個体が来るようで、彼女(彼女)はこの勝手口を自分の領域にしている。時たま他の個体がやってくると追い払っていることがある。

その彼が獲物とするのは体長1cmまでの蛾か、トビウカである。勝手口のガラス戸に蛾類が集まる時間帯は、おおむね私の夕食時であり、宵の口を過ぎると蛾類はねぐらに戻るのかあまり飛翔しない。

獲物の確保は生命維持に欠かせない行為だ。その小生物の捕獲実態を見る良い機会が、夏の宵の、わが家の勝手口のすりガラス戸である。観察記録を取ろうとすると機材を常に用意しておかねばならぬ。

相手は生物で、素早い動きで獲物を捕獲するので、その瞬間を写し撮るのは私には至難の業だ。すりガラスの向こうで動くヤモリにピントを合わせるのも大変だが、それ以上に困るのは、こちらの電灯の明かりが映り込むことだ。明かりなしでは蛾もやって来ないし、ヤモリの姿も動きも写せないから明かりは必要だ。だが、それがハレーションの原因となるのは誠に困る。運よく彼と蛾がハレーションの起きない位置にいてくれるのを願うばかりだ。

ヤモリは獲物に飛び掛かる前に必ず、自分のしっぽをぴいーんと立て、それをゆっくり何回か左右に振る。そしてしっぽの先が小さい輪になった感じになり、動きが止まりだした瞬間、一挙に獲物に襲い掛かる。

しっぽを振る。この行為が何を意味するのか、私はヤモリのこの行為に気付いてからがぜん、夏の宵のヤモリの出現を待ち望むようになり、わが家の勝手口のすりガラス戸に期待を高めていた。

彼の捕食はほとんど 100%の確率で成功し、実に見事である。獲物から眼を離さず心持背を低く保ち、じわりじわりと距離を縮める行動は、大型野獣に共通した行為と認識している。しかし、小生物がある間合いまで接近し、獲物の行動を見定め、襲う直前にしっぽを振る行為

は寡聞にしてこのヤモリしか知らない。狙った獲物を襲う興奮が、しっぽを揺らせるのか。不思議なのは、蛾がこのしっぽ振りに気付くことなしにじっとしていることだ。ヤモリはしっぽを振ることで、しっぽの先からなにがしかのオーラを出し、獲物を催眠状態にする特技を持っているのか。

ニュージーランドではウォークライと言われる風習があったと聞いている。敵を襲撃前に仲間と勝鬨を挙げる行為であるが、一種のダンスもするとも。わが家のヤモリがこれだとは思えないが、これに似た行為ではあるので、私はウォークライと名付けている。

その夕、獲物の蛾がいつになく多く現れ、スリガラス戸のあちこちに止まっていた。すかさず2匹のヤモリがやってきて、それぞれに獲物を狙い身構えた。と、どうだろう、2匹がほとんど同時にしっぽを振りはじめたのだ。スリガラス戸の左上と右下(こちらが常連)のヤモリが獲物との間合いを縮め、攻撃態勢完了となって、ウォークライが始まった。私も身動きせずにこのシーンを見つめた。

2個体ほとんど同時にウォークライが終わると、瞬間、狙った獲物に向かって彼らが跳躍した。襲撃はともに成功。それぞれの口に蛾の頭が呑み込まれ、蛾の羽根が半開きにした扇子の要を啜えた状態で、彼らの口の先で広がっていた。

スリガラス戸の上下で、2個体のウォークライが同時にはじまる情景。こんな稀有な状況に巡り合えるのは、田舎のわが家なればこそと、私は田舎家の幸せに酔っていた。

これまで見たヤモリの蛾への襲撃は、蛾の頭からで、後ろから襲うのは見たことがない。全て頭から呑み込んでいる。それで腹を膨らませた状態で、また次の蛾を狙っていたこともあり、ヤモリが貪欲に獲物を摂取する行為に驚いた。獲物を獲得できる時にはためらわず腹に収め、食べられるときには食べるとの遺伝子が働いているのか。

その時、ガラス面を摺るまでに太く膨らんだ腹が、彼の行動を阻害し、次の襲撃は失敗だった。彼らは獲物をどんな風に自分のエネルギーに変えているのだろうか。獲物を捕らえたヤモリはスリガラス面から消えるので消化の実態はわからない。

先にヤモリが獲物との距離を詰める状況を、じわりじわりと書いたが、じつはこの行動を見たとき、私には岩登りの鉄則を実践していると思え驚いたのだった。

岩登りでは3点支持法を喧しく教えられる。すなわち、岩登りでは手足のうち、登攀に際して動かせるのは1本だけと厳しくしつけられ、二つ同時など論外だ。

ヤモリが獲物に接近する状態が、まさにこの3点支持法に則った行為であるのを知り、壁面を自在に移動できる能力を持つ彼らの、行動の秘密を知らされた思いだ。

どんなに動きが早くなってもこれは変わらない。体重のある生物が壁面を移動する際の鉄則を改めて知らせてくれたのはこのヤモリだった。

お知らせ

能登川博物館へ

「飛び出し坊やとゆかいな仲間たち」という企画展を 2012 年に開催された能登川博物館を訪ね、その時の展示内容や研究の観点などについて、学芸員の杉浦隆支さんにお話を聞かせていただこうと思います。飛び出し坊やは予想以上にみんなに注目されているようですし、これを取り上げた能登川博物館もユニークですね。面白いお話が聞けると期待されます。皆さんも一緒に行ってみませんか。

日 … 2016 年 1 月 16 日 (土)

集合 … 13 時 30 分に JR 能登川駅 西口 (湖側) ロータリー

(駅から能登川博物館までは徒歩 15 分、またはタクシーで行きます)

レポーターだよりの訂正箇所

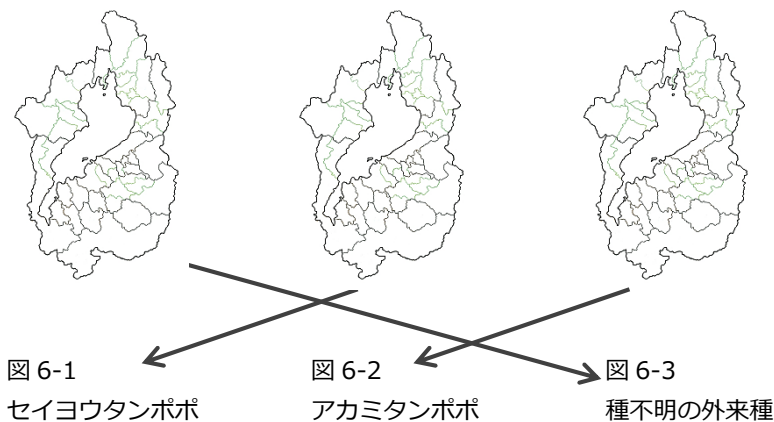
11 月にタンポポ調査のまとめを記したレポーターだより (通巻 45 号) をお届けしましたが、郵送で受け取られた方の冊子には記載間違いがありました。お詫びして、訂正させていただきます (電子版の方へは訂正後のものをお届けしていますので変更はありません)。

間違っていた箇所は、レポーター便りの 5 ページ目にある「図 6. 外来種とその雑種の分布図」で、3 つの図 (6-1~6-3) の地図と図表名の入れ違えが生じています。図表名はそのままにして、地図を次のように結んで下さい。

図 6-1 セイヨウタンポポは現在の中央の地図

図 6-2 アカミタンポポは同じく右の地図

図 6-3 種が不明の外来種は同じく左の地図



このように直していただきますと、地点のメッシュ数が正しく対応します。お手数をおかけいたしますが、よろしくお願いいたします。

フィールドレポーター活動報告

定例会は毎月原則として 第1土曜日、第3土曜日に博物館の交流室で行っています。

2016年1月から2015年3月までの活動内容は次の通りです。

月	日	場 所	参加者	主な内容
10月	3日(土)	大津市伊香立南庄町	14名	①里に降りてきたアカトンボの調査と観察
	17日(土)	交流室	6名	①赤トンボ調査の集計結果報告 ②タンポポ調査報告書の検討
11月	7日(土)	交流室	7名	①レポーター便り(タンポポ調査)印刷発行 ②セイタカアワダチソウ調査の進行状況について
	21日(土)	交流室	8名	①セイタカアワダチソウの調査状況について ②次回調査テーマの協議
12月	5日(土)	交流室	8名	①セイタカアワダチソウ調査のまとめ方について ②次回調査についての協議
	19日(土)	交流室	7名	①セイタカアワダチソウ調査のまとめ方について ②次回調査テーマの検討

フィールドレポーター1月～3月予定

次のとおり計画しておりますので、皆さんお気軽にご参加ください。見学も大歓迎です。

なお、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

	日 時	内 容	場 所
1月	9日(土) 13:30～17:00	定例会(掲示板81号発行)	博物館交流室
	16日(土) 13:30～17:00	能登川博物館訪問	能登川博物館
2月	6日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
	20日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
3月	5日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
	19日(土) 13:30～17:00	定例会(掲示板82号発行)	博物館交流室

編 集 後 記

この冬、我が家周辺ではまだ初雪が降りませんが、大寒は間近です。滋賀県に降る雪は“積もっては融け”を繰り返すのが特徴だそうです。「それは当たり前」と思われるでしょうが、“当たり前”は人の意識の意外な落とし穴かもしれません。次回の飛び出し坊や調査は社会を映すものが対象ですので、“当たり前”のフィルターを外して見ることでより重要ななと思っています。

(担当 前田)



滋賀県立
琵琶湖博物館
交流センター
〒525-0001 草津市下物1091
TEL 077-568-4811 (代) FAX 077-568-4850
E-mail: freporter@lbm.go.jp

琵琶湖博物館 フィールドレポーター

掲 示 板

2015年度 第4号 通巻第82号 2016年4月16日



グミの花が咲きました

フィールドレポーター調査の多数性・多様性

今回、飛び出し坊や調査を行うにあたって、飛び出し坊やの密度と多様性が、地域の協働の力の指標になる、という仮説を提起しました。飛び出し坊やは、(少なくとも建前上は)地域の団体が自発的に設置するものです。だから、地域の自主的な共同活動が盛んなほど数が多くなり、また手作りのものや地域独自の工夫を凝らしたものが増えて多様性が増す、と考えたわけです。もっともその検証は、調査結果の分析を待たなければなりません。

さて、フィールドレポーターの調査対象である飛び出し坊やから、フィールドレポーター自身へと視点を移してみます。これまでの「フィールドレポーター便り」「フィールドレポーター掲示板」を見ると、実に様々な調査が行われ、また大量のレポートが蓄積されてきたことがわかります。

<http://www.lbm.go.jp/fieldrep/index.html>

この多様で大量なレポートこそが、フィールドレポーターが蓄積してきた協働の力を示しているのではないのでしょうか？

フィールドレポーター便りの調査タイトルを見ると、担当学芸員の意向が強く出ているものがある一方で、近年では明らかに学芸員の発想ではない、フィールドレポータースタッフのアイデアによるものが増えてきています。その結果として、調査内容の多様性は確実に増大してきています。博物館側から見れば、これは学芸員の関与の減少を意味しているのかもしれませんが、しかしフィールドレポーターにとっては、自主的な共同活動へのシフトとして、肯定的に捉えられるものであると、私は考えます。

今回の飛び出し坊や調査も、1人のフィールドレポータースタッフの提起から始まったものです。一つ協力してみよう、という方は、ぜひともお近くの飛び出し坊やを調べ、調査票の提出をお願いします。そして、新しいフィールドレポーター調査のアイデアをお持ちの方は、ぜひともフィールドレポータースタッフにご参加ください。

フィールドレポーター担当学芸員 大塚泰介

1	フィールドレポーター調査の多数性・多様性	大塚泰介	1p	7	ヤモリとクモ 2	津田國史	10p
2	早春の湧水湿地の小動物	大塚泰介	2p	8	厄介物転じて高級食材に木の葉は森に隠せ、厨芥は土壌に還せ 自然愛好グループの横の連絡網を	加固啓英	12p
3	田んぼに落ちた小人の帽子？	藤野勇馬	3p				
4	報告前にひとこといわしてください	中野敬二	4p				
5	「我が家のタンポポ戦争」の近江心気郎 様	乾 明美	7p	10	フィールドレポーター活動報告	スタッフ	14p
				11	フィールドレポーター予定	スタッフ	15p
6	野菜で造る神輿	津田國史	8p	12	編集後記	スタッフ	16p

早春の湧水湿地の小動物

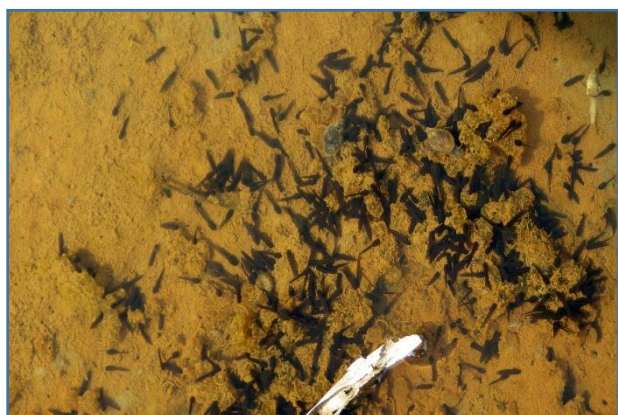
大塚 泰介



3月下旬から4月上旬の湧水湿地を覗いて見ますと、卵や孵化したばかりの小動物（仔魚）が見られます。

左上：カスミサンショウウオの卵のうち
左下：ニホンアカガエルのオタマジャクシ

右下：ミナミメダカの群れ



田んぼに落ちた小人の帽子？

藤野 勇馬



みなさん初めまして。昨年からフィールドレポーターになりました新人の藤野です。今回はあいさつ代わりに私の大好きな貝を紹介させていただきます！

世界中のあらゆる環境に生息する貝類は、それぞれの環境に適応して様々な色や形、機能を持った貝殻を進化させてきました。テンシノツバサ、ゴリラノナミダ、リュウオウゴコロなどは、いずれもそのユニークな貝殻の形が名前の由来となった貝です。

上にあげた3種類の貝はどれも海に生息する貝ですが、森や田んぼなど、私たちの身近な場所にも変わった姿や名前を持った貝がたくさん住んでいます。たとえば、キセルガイの仲間は、カタツムリの仲間でありながら、まるでキセルのように細長い殻を持ち、その特徴を生かして土の中や腐った木の中にもぐりこんで生活しています。川や池に住むイシガイ類の中には「トンガリササノハガイ」というなんともするどげな名前の二枚貝もいます。

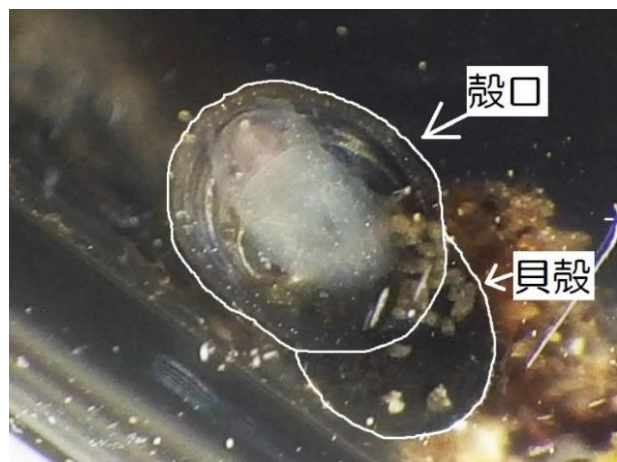
これまで上にあげた以外にも色々な貝と出会いましたが、その中でも特に印象に残っているのは、なんといっても「コビトノボウシザラガイ」という巻貝です。

小人の帽子というと、白雪姫の七人の小人たちがかぶっているようなポンポンのついたとんがり帽子を想像してしまいましたが、コビトノボウシザラガイ（以下、コビト）の形はむしろハンチング帽か野球帽に似ています。

実はこの貝、外来種ではないかといわれており、日本にはもともとこれにごく近縁なカワコザラガイという笠を伏せたような形の貝が生息しています。コビトも小さい頃はほとんどカワコザラと見分けがつかずません。

笠のふちが広がるように成長していくカワコザラに対し、コビトは入口をふさぐようにして殻が成長するため、貝殻が帽子のような形になるのです。

外来種ではありますが巻貝としてはかなり特殊な形の貝殻を持った面白い貝です。見つけた人はぜひじっくりと観察してみてください！



報告前にひとこといわしてください

151023 FR 中野 敬二

とにかく憎たらしい花でした。

記憶が曖昧ですが、確か結婚する前だったので1970年代の半ばとおもいます。当時、京都は梅の宮神社の近くで寮生活をしておりました。

近くの桂川、松尾大社、西芳寺がお気に入りの散歩コースでしたが、寮の周り、桂川の土手、田圃の畔などが妙に黄色っぽくなってきました。セイタカアワダチソウを意識し始めた最初と思います。

当初きれいという感覚も有りましたが、数の多さと背の高さが気になりだすと、そのうち不快な気持ちに変わっていきました。

わたしにとってさらに問題だったのは、当時とても好きだった女優の十朱幸代さんがこともあろうに ♪・・・その名も セイタカアワダチソウ・・・♪
なんて歌いだしたことです。

よく聞けば、この花アメリカからの渡来種ではないか。頭に血が上り、歌の内容はともかく「なんちゅう歌を歌ってくれるのか 舶来趣味もええ加減にせえ！」「またアメリカに負けた、情けない」なんて一杯飲みの最中にクダまいてると「まあまあ そう気い立てんと・・・」と仲間になだめられました。

今の時代の方は理解しがたいでしょうが、当時は妙な敗北感を味わったものです。

あれから40年。フィールドレポートの依頼を受けテーマに接したときに先ず頭を過ぎったのはこのような情景でした。

すっかりセイタカアワダチソウのことは忘れておりましたが、十朱幸代さんのあの歌が懐かしく、調査はここから始めることにしました。

歌詞全部紹介したら良くわかるのですが著作権の具合もありますのでサワリの部分の紹介にさせていただきます。全詞ご存じの方がいらっしゃることを期待します。

作詞は吉岡 治さん、作曲は岸本健介さんです。

ポップス調演歌という感じで ♪ハハッハ ハハハ ハーン♪なんてバックコーラスにのって歌われています。多分、思い入れて深く尽くしたのに、なぜか突然捨てられ、居なくなった相手をうらむ心と、まだ惹かれる気持ちを捨てきれないという歌詞内容です。

その一番は

♪帰って行ったか故郷へ♪
となつたようです ♪それはないじゃない♪
ハハッハ ハハハ ハーン。

そして問題の二番、

♪コバルトブルーのあいつの郷に・・・
燃えるか セイタカアワダチ草♪

と問題のフレーズがでてきて
このあと恨みのことばが少し続きまして、
こんな気持ちを言っています。
♪手紙のひとつも出したいけれど・・・ 基地の区別もつきゃしない♪

そして最後に

♪あたしにゃ沖縄 遠過ぎる♪

以下何回も繰り返して END となります。

どうやら ♪その名もセイタカ・・・♪ と思っていたのは記憶違いで、
♪燃えるか セイタカアワダチ草♪ と、さらに過激でした。

当時この歌に関しては、なんちゅう歌や、とばかり思っていました、今回改めて冷静に聞いてみました、そして感じました。

少し違う。大きな勘違いをしていたようです。

この歌の少し前 1972 年には沖縄返還があり、沖縄がものすごく身近になりました。ちなみに、歌詞の中に出てくる“基地”は“ベース”とうたいます。

生活の中で、ニュースで、みんなの意識が 遠くて近くなったこの地域に心ひかれ憧れるようになっていた時でした。

セイタカアワダチソウの燃えるような黄色をつかって、南国のイメージを強烈に、鮮やかに表現されたのではないのでしょうか。

このような切ない女ごころを歌わねばならない人生が このニッポンのどこかにあっても不思議でない時代であったのだと、と納得した次第であります。

歌っている十朱幸代さんへのわだかまりは解消しましたが、セイタカアワダチソウには若干の不快感が残っているのを感じます。

調査に当たって妙な先入観を持たず観察したいと考えます。

色の思い出が出てきましたので、ついでにもう一つ書かせてください。

セイタカアワダチ草の歌からさらに 20 年前。

♪君~の名はとーー♪ という歌がラジオから流れていたころ、当時わたしの家は京都府園部町（現、南丹市）の川の近くにありました。

田圃ばかりの在所の春は一面レンゲ畑で、この世のなか全部が赤紫色に見えました。これはいま思い出しても懐かしい。

田植えが始まると一気に緑になります。

ホタルが出だすと、菜種の実を採ったあとの乾燥した草束をもってとりに出かけます。なぜかホタルの色は青白いのではなく鮮やかな黄色であったような記憶でのこっています。

ホタルが家の中に入ってこなくなるころから かなり長い期間、園部川の河原が一気に黄色くなります。

子供仲間は「月見草や、月見草や」と言いながら花を摘んでチューチュー吸いながら「あまいナー」と言い合ったものです。

貴重な糖分の補給源でした。花がとても大きかった気がします。

秋になり彼岸のころは田圃の畔や河原が真っ赤になります。

「火事花とってきた」と言いながら家に帰ると「死人(死)ト花、家に入れたらアカン」と母親にしかられました。

その火事花の勢いが無くなって田圃の畦道の赤みが薄くなったそのあとで、黄色い花がかなり目立って咲くものだ、というのを思い出しました。

形やにおいは全く覚えていません。

草丈が高かったかはっきりしません。

しかし、かなり鮮やかな黄色は今もおぼえています。



田んぼの畦を占有するセイタカアワダチソウの群落 2015.10.20 津田 撮影

「我が家のタンポポ戦争」の近江心気郎 様

甲賀市 乾 明美

タンポポの茎の長いのに驚かれています 奥さんの「タンポポは長いもんや」の答えにバンザイです

何故って学生時代（65年程前）「タンポポ」という仇名の男の先生がいました、「花（鼻）の下が長くてスケベエだから」という理由からです。

外来種ばかり目について特定の場所以外は日本タンポポはもう消えたと思っていたら 昨年の調査の時 見事に復活した日本タンポポの群生に会い嬉しくなって送ったらそれは「カンサイタンポポの姿をした雑種」とのことでした 在来種が戻ってきたのではなく 在来種にそっくりな雑種だったのです。

今年はまだまだあると信じているあちこちの在来種（純粹の）をみつけてみようと思っています。

50年程前に比べたら数はうんと減っているがまだ虫は飛び交い 赤トンボも稲刈り後の田や畑を飛んでいる

せいたかあわだち草はその頃はまだなかったように思うが今はあらゆる所に咲いている。

季節が来ると蝉の声はやかましく まだまだ自然の中に生活していると喜ばしいが年に何回か猿の集団（20～30数匹）やはぐれ猿（1匹）の来訪に畠物はやればなし、何とかならないのかなあとと思います



セイトカタンポポ 2015.05.02 津田撮影



シロバナタンポポ 2015.05.02 津田撮影

野菜で造る神輿

FRS 津田 國史

野洲市・御上神社の秋の神事＝若宮殿相撲御神事＝ズイキ祭りの支度を見学できる有難い機会に恵まれ、10月11日朝から琵琶湖博物館・渡部さんの誘導で、FRの有志は、三上の集落・大中小路の公民館に集まった。

集落の人たちはすでにズイキ神輿の屋根葺きにかかっておられ、神輿の胴(側)を作る過程は終わっていた。栽培のたんぼから、事前に切り出したズイキを選別し、太さを揃えて並べ、長い竹串に刺す作業があったはず。それは、ズイキを胴に立てかけてではなく、必要な本数を平面に並べ敷いて、4面のそれぞれを串刺しにされていた



ズイキで屋根葺き

を平面に並べ敷いて、4面のそれぞれを串刺しにされていた

のではと推察した。



ズイキに竹串を刺す

神社に奉納の神輿を青いズイキで作るのは、もう450年以上も昔から、三上の人々によって伝承されてきた歴史がある。身近な材料を使って作ろうとの発想はまことに自然で納得できる思いではある。神輿の材料になるズイキを育てるには1年の期間が必要だし、育てるたんぼの選定はもっと前に決めねばならぬ。この手順も年中行事として伝

承されての今があるのだ。

ズイキの切り口は青白く綺麗だ、しかし時間の経過につれて黄ばみ褐色になる。そのため目立つ四辺の屋根の切り口は少し長めに作っておいて、当日の朝に僅か切り落とし、青白いズイキが、神輿の軒端をきれいな曲線で飾るようになっているらしい。他にも、壁面を構成するズイキの幹が細ると見苦しいので、隙間が目立たないようにと、予め中にズイキの青い葉っぱを詰めるのだと教えられ、地域の人たちの細やかな気遣いに感心していた。

こだわりの作業に鳥居の額があった。神輿の台座正面に、高さ1尺(30cm=1尺と言ったほうが神輿には似合う)ばかりのズイキの鳥居が真正面に置かれる。この鳥居の正面上部に掲げられる額もやはりズイキの幹を1寸(3cm)ほど切り出し、青い軸を縦に削って白い面を出す。飾りの鳥居ではあるが、その額面に御上神社と紅い文字で神社名を表わすことが求められている。

その朱文字は、なんとケイトウの紅い花びらを1片ずつ埋め込んでいるのだ。鳥居の額が1寸不足だから幅は半寸もない。名刺の半分以下だ。そこへ細く削った竹

串に突き刺したケイトウの紅い花びらで、御上神社と埋め込んでいく。小さなケイトウの花びらで漢字を書く作業は、まさに名刺の名前をケイトウの花びらで書く作業だ。根



ケイトウ花卉の埋め込み



額の付いた鳥居が出来た



神輿の正面に収まった鳥居

気と集中力が求められる繊細な手仕事だった。

屋根や胴を縛る具材も、山から採ってきた弦草で要所を結わえる。括った余りが、双方にぴいーんと反って装飾を兼ねているのは見事というしかない。縄の巻き付ける回数や、棟を構成するズイキの数も揃えているように思う。

長い歴史を閲してきたズイキ神輿には、自然とそれぞれの規矩が出来ている。軒端の長さや、4本の棟とその先端の反り角度（シュウギ）などは定規に合わせて切り揃えている。神輿の屋根上に前後に渡す担ぎ棒も、前がやや長くなるように台座から伸びた白い紐で括られる。これは担ぐ人が神輿との間に入っても動ける空間を作るためであろう。

神輿が、頭人宅に集まった親戚たちの手で作られていた昔はいざ知らず、いまの神輿作りは地区の作業となり、地区の経験者が宰領する作業である。なので神輿の出来上がりは、この宰領の経験や、感覚、美意識に負うところが大きいようだ。二つの地区の神輿作り作業を見学して、ズイキ処理のわずかな違いが、神輿の出来上がりを左右していると見ていた。

集落ごとに出来る限り身近な自然の具材を使い、競ってきれいな神輿を奉納する行事が伝承されてきたこの御上神社の秋の祭礼。初期は単純にズイキで作る神輿だったろうが、他の地区より少しでも良く、美しくと願う村人の意識が、長い年月を経て今のズイキ神輿に出来上がってきたのだと頷いていた。

そして、このズイキ祭りに関わる詳細を、記録として文書に遺すしきたりを、守り伝えてこられた三上の人々の営みに深い感銘を受けていた。



出来上り近いズイキ神輿

ヤモリとクモ 2

FRS 津田 國史

先号（81号）でヤモリの獲物捕食の様子を伝えました（ヤモリとクモ 1）
今回はヤモリがクモの糸に絡まって捕食の対象？になっていた日の様子です。
（先号のガラス戸のヤモリとは別の個体）



しっぽを真上に挙げて洗面所の隅にいた個体は、先号で伝えた、勝手口のすりガラス戸に現れる個体よりはるかに小さい体躯で、人間なら小学生までの年長組といったところかも。ヤモリの成体標準を知らないで、見た感じで子供と判断したのは、クモの糸に絡められても、逃れられないかよわい体力からで、大人のヤモリならクモの糸くらいは難なく掻き捨てられると思っていた。だがこれは恥ずかしいが私の無知の所為だった。

クモの糸に絡められる生物は、蛾や蝶だけでなく、かなり大型の昆虫・鳥類までが、粘性の強いクモの糸に絡められると後日知らされた。その素晴らしい写真記録の見られるサイトを、博物館の榎永学芸員から知らせて頂いたのに、迂闊にもプリントもコピーもしなかったことを悔やんでいる。（15年9月下旬の朝日デジタル版に載った、小鳥がクモの糸に絡まった日本での記録。これは素晴らしい写真で、今回のヤモリとの対比に絶好の写真だったのに残念）

わが家の洗面所でクモの糸に絡まっていたヤモリは、左後脚に絡んだクモの糸で、もがいているうちにしっぽも絡んで、しかもその糸の発生源に逆さに釣り上げられるような状態になって、しっぽを上に出しているのだと判断した。どんなクモがこのヤモリを捕らえたのか？その絡め捕った主を探したが辺りには見当たらない。

クモの巣と言えば、中心から放射状に延びるメインの糸に交差して、等間隔で螺旋状に丸い網目になった巣を多く見かけるが、今日の巣は通常の巣ではない。これを何と形容すればいいのか判らないが、誠に無規則、乱雑。天地左右に縦横に引っ張りまわして、洗面所の隅っこを塞いでいるとしか言いようのない巣だ。

その隅っこに向かったヤモリの、左後肢がひょいとクモの糸に振れたのだろう。邪魔な糸を外そうと、脚をばたつかせたり体を捻ったりしていたら、拳句の果てはしっぽにまで糸が絡みついたと推察した。

私はヤモリの体表皮質や、クモの糸の粘性を知らないが、ヤモリが自力でいまの状態

から逃れるのは無理と判断した。この足許のヤモリを解放してやるのは私の仕事と思い、まず記録とデジカメを構えたが、洗面所の隅っこの撮り難い場所だ。なんとか撮れはしたが状況の判る記録からは遠いショットだ。それと、捕らえた主が見当たらない？ 思い付いた！ 巣を揺すればいいのか！！



軽くチョンチョンと巣に触れてみたが変化なし。少し大きく巣を揺すったら、壁クロスの下際の、巾木の黒いゴミ粒から脚が伸び出した？ 1mmある無しの黒いゴミ粒が、クモの体躯だった。

“これはこれは驚き桃の木サンショの木！下からクモのお出まし！恐れ入谷の鬼子母神！”と寅さんを做って与太ったが、こいつがこのヤモリを食べるとは到底考えられない。だが糸を吐き出して獲物を狙っていた巣の主には間違いはない。掛かった獲物があまりに大きくて、始末に困ってるか、獲物を放棄したかだと判断した。



クモが脚を広げた状態は優に3~4cmあり、か細い脚が3対伸びて素早く移動する。

慌ててカメラで追うが、ピントが合わない。じっとしていても対象が小さいので私のデジカメではピント外れだ。困った相手だ。ヤモリは囚まって困っているが、わたしは撮らまえられずに困っていた。

保護したヤモリに絡んだクモの糸を外そうとするが、相手がかよわいやモリではあまり強く擦れない。クモの糸はやモリがもがいた数だけ何重にも絡んで左後脚の指が開けない状態だ。

壊れ物を扱うような繊細な作業は、私には出来ないなので、知人に頼んで丁寧に絡みを解いてもらったら、ヤモリは元気に動き回れるようになった。

これを自然の環境に還してやることにして、出かけた美山の山麓に放してやったのは中秋の名月の午後だった。

彼も山の端から揚る月をゆっくり眺めていたかな。



「厄介物転じて高級食材に」

2016・03・21

彦根市 加 固 啓 英

日本の冬の食卓の定番のミカンが近年欧米からテーブルオレンジとして、その味と指先だけで皮が剥けることから人気が高まっていると聞きます。云われてみれば柑橘類の内で日本のミカン程甘い物は思い当りません。

テレビ通販の小さなミキサーを購入、ミカンの皮が腐らない様に天日干しとして蓄えた物を最小限の水と共に破碎したところマレードかジャムの様な物ができました。

これに適当量の砂糖を加えてトースト等に塗り重宝しております。日がたつと上面に少量の水が分離してきますが、ここでペクチンが思い浮かびますが、それが手許に無く、ジャガイモ澱粉製の片栗もどき粉で粘度の補正ができます。

保存剤を含まない為、時々電子レンジでチンする必要が有りますので金属部分の無い容器が望ましいです。

「木の葉は森に隠せ、厨芥は土壤に還せ」

2016・03・22 彦根市 加 固 啓 英

ここ彦根市では家庭から出る生ゴミは処理費を上乗せし、「燃やすゴミ」と大書されたポリエチレン袋で回収され一般廃棄物として市の焼却場で最終処分されます。

食材を扱う企業からの厨芥は産業廃棄物として多分民間の焼却場で処分されているのでしょ。

これらの生ゴミ、厨芥は乾燥していれば点火するだけで持続燃焼する筈ですが、洗浄水も加わって多量の水分を含む為、化石燃料を消費しての焼却で CO²や NO_x を空气中に放出しております。 ※ 100℃の水の気化熱：2257J/1 g.

以下は提案です。

家庭菜園や花壇の播種や苗植えの前に30cm程畑土を掘り下げて生ゴミ・厨芥を埋め、畑土で埋め戻した後に農作業をすることにしませんか。

これで次年度には完全な腐植質となり、これを混ぜ込んだ畑土は更に保水性・通気性が改善される筈です。

又、卵の殻、貝殻、魚の骨、等は酸性に傾きがちな土質 pH の歯止めとなると思います。

以下は私見です。

無農薬有機栽培には賛成ですが、化学肥料不使用には反対です。

収穫、刈り取りの度に多量に農地から収奪される N・P・O を安価で無菌の素性の明らかな化学肥料で補う事には何の問題も無い筈です。

今から60年以上も前、自家製造の出来る堆肥や厩舎肥に対し当時は高価だった化学

肥料は「金肥」と呼ばれておりました。

又、「雷の多い年は米が豊作だ」とも云われておりました。理由は空気中の N₂ が雷の放電で酸化され、雨水と共に地中に入り、巡り巡ってアンモニウム塩となる理屈です。これって昨今問題の排気ガス由来の NO_x と同じではないですか。

以下は別件です。

貴博物館の相談室は度々利用させて頂いておりますが、質問に対する貴重なお答えが私だけの物とせず、フィールドレポーター全員に共有出来る様掲示板にコラム欄を設けて頂けないでしょうか。

以前に私の投稿・掲載文を他誌・他紙に二重投稿して良いとの許可を頂いて居りますが投稿者の同意の有る物についてはこれを認めるとの文書による（掲示板紙上の）確約をいただけませんか。

当分は雑誌 BE PAL が対象です。

二重投稿の件、本文にその旨明記していただければ、一向にかまいません。ただもう一方の投稿先が二重投稿を禁止している場合や、著作権の移譲を求めてくる場合がありますので、そちらへの確認を十分にとっていただきますようお願いいたします。（フィールドレポーター2015年度担当 大塚より）

「自然愛好グループの横の連絡網を」

2016・03・22 彦根市 加固 啓英

私は関東地方より 1971 年に滋賀県に転入した者です。

前世紀末の定年退職まで色材・高分子・コンピュータ業界で応用化学を生業としてきましたが、諸事情が許さず進めなかった環境・生物関係をホビーとして楽しんでおります。

フィールドレポーターの調査項目に近いが手法等が少々異なる調査が、他の団体によってほぼ同時に進行している事が多い様です。

又、調査報告も生物の発見生物等も人口密度（目玉の数）に比例し勝ちになると思います。

そこで人口の少ない地域の小学校に働き掛けたり、医・歯科病院や理・美容院の待合所等に置いて頂いたり、図書館や他の博物館・美術館等にフリーペーパーとして置いて頂けないでしょうか。そこに CM のチラシ 1 枚を添えて広告収入を得ることは赦されないでしょうか。

文化的企画は林業と同様に「長者の髭」の持ち出しとなり勝ですから打開策が必要です。

フィールドレポーター 活動報告

定例会は原則として、毎月第1土曜日、第3土曜日に博物館の交流室で行っています。掲示板の最終ページの予定表をご覧ください。その他行事はその都度案内しています。お気軽に参加して下さい。2016年1月から2016年3月までの活動内容は次の通りです。

月	日(曜)	場 所	参加者	主 な 内 容
1	9日(土)	交流室	7名	① 掲示板81号発送 ② セイタカアワダチソウ調査データの検討と考察 ③ 飛び出し坊や調査検討
	16日(土)	能登川博物館	11名	① 飛び出し坊やの話を伺う ② 飛び出し坊や調査検討
2	6日(土)	交流室	10名	① セイタカアワダチソウ調査データの検討と考察 ② 飛び出し坊や調査 調査方法・質問項目の検討
	20日(土)	交流室	7名	① セイタカアワダチソウ調査データの検討と考察 ② 飛び出し坊や調査 調査方法・質問項目の検討
3	3日(土)	交流室	8名	① セイタカアワダチソウ調査データの検討と考察 ② 飛び出し坊やの映像資料を見る ③ 飛び出し坊や調査 調査方法・質問項目の検討
	19日(土)	交流室	7名	① セイタカアワダチソウ調査データのまとめ ② 飛び出し坊や調査 質問項目の確定

交流室での定例会を見てくださるフィールドレポーターや、はしかけ会員の方が増えています。

わざわざ足を運んでくださる方、館での他の会に来たついでに寄っていかれる方など、これは大変良い傾向だと受け止めています。

フィールドレポータースタッフって、でどんなことをしているのかなと注目して下さる来館の方々の思いが嬉しく、有難いです。

フィールドレポータースタッフ

フィールドレポーター 4月～6月 予定

次のとおり計画しておりますので皆様のご予定、ご参加をお願いいたします。
 なお、予定が変更になる場合もありますのでご了承ください。

	日 時	内 容	場 所
4月	2日(土) 13:30～ 17:00	定例会 調査票発送	博物館 交流室
	16日(土) 13:30～ 17:00	定例会 掲示板発送	博物館 交流室
5月	7日(土) 13:30～ 17:00	定例会	博物館 交流室
	21日(土) 13:30～ 17:00	定例会 発表会	博物館 交流室
6月	4日(土) 13:30～ 17:00	定例会	博物館 交流室
	18日(土) 13:30～ 17:00	定例会	博物館 交流室

おことわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことです。

まだまだ先になりますが、今年も比良でのトンボ調査を予定しています。
 昆虫の活動は季節・天候に大きく左右されます。人間の都合だけで決めるのは本末転倒
 なのですが、調査に参加していただく方々の都合も大きな要因ですので、トンボの飛翔
 が期待できるのと、出来るだけ多くの方々の参加が望める、8月の最初の土日を調査日
 の第一候補にしています。

お子様と一緒に涼しい比良で、夏休みの宿題を片付けるつもりで、いまからご参加を
 予定されてはいかがでしょうか。一昨年、独りで参加してくれた中学生もいました。

秋には中池見の観察を予定しようかと検討の対象になっています。
 ここは福井県と、滋賀県の県境に近い山中の湿原で、FRSのHさんのフィールドです。
 珍しい植物があるとのことですので、Hさんの案内で、みなさんと行ってみたいところ
 です。

フィールドレポータースタッフ

編集後記

みなさん、今年のお花見はいかがでしたか。
私は、電車に乗って目的地に向かう車窓から眺める桜もまたいいなと感じていました。
至る所に桜の樹が植わっていて、それが一斉に花を開かせますので、日本の春は美しく
良いところだと思っています。

次回の調査は「飛び出し坊や」です。もうみなさんのお手元には調査票が届いている
と思います。みなさんのお家の近辺や、出かけられた先で眼にされることもある坊や！
発祥地の滋賀で、いまどこで、どんな坊やが活躍しているかの調査です。

飛び出し坊やの調査準備のため、東近江市能登川博物館に向かう折に通りがかった集
落で、飛び出し爺々と婆やに出会いました。老人会設置との記入を見て、対象は子供よ
り年配者が多いのだろうか、地域の特色を垣間見たような思いでした。
みなさんの見かけられた坊や（爺や・婆や・姉や）の様子をお知らせ下さい。

今年のフィールドレポーター交流会を、いつどこでするか検討しています。
昨年の菅浦がみなさんから好評でしたので、今年もそれに劣らない交流会をと念じてい
ます。みなさんのご希望をお知らせいただければ嬉しいです。

担当 FRS 山崎



滋賀県立
琵琶湖博物館
交流センター
〒525-0001 草津市下物1091
TEL 077-568-4811 (代) FAX 077-568-4850
E-mail: freporter@lbn.go.jp